

南小泉遺跡

—第61次発掘調査報告書—

2010年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政につきまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。当教育委員会といたしましても、先人の貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら、次の世代に継承していくよう努めているところであります。

南小泉遺跡は仙台市の東部に広がる、市内でも最大規模の遺跡です。昭和初めの霞ノ目飛行場の拡張工事によってその存在が知られ、これまで多くの発掘調査が行われています。調査の結果、縄文時代から近世にかけての遺構や遺物が確認され、この地域には縄文時代以降継続的に人々が生活していたことが明らかになっています。

今回の調査は、仙台少年鑑別所の庁舎新築工事に伴うもので、第61次発掘調査の成果についてまとめたものです。第61次調査では、古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡、近世の墓壙が発見されました。竪穴住居跡からは土師器や須恵器が出土し、近世の墓壙には煙管や柄鏡等が副葬されていました。

当教育委員会におきましては、発掘調査状況の公開・活用を進めるため、調査の概要を紹介する広報板等への掲示や遺跡見学会の開催など、今後もより多くの市民の皆様に興味をもっていただけるような活動を行っていきたいと考えております。

今回の調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しまして、ご指導、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げて序といたします。

平成22年3月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇

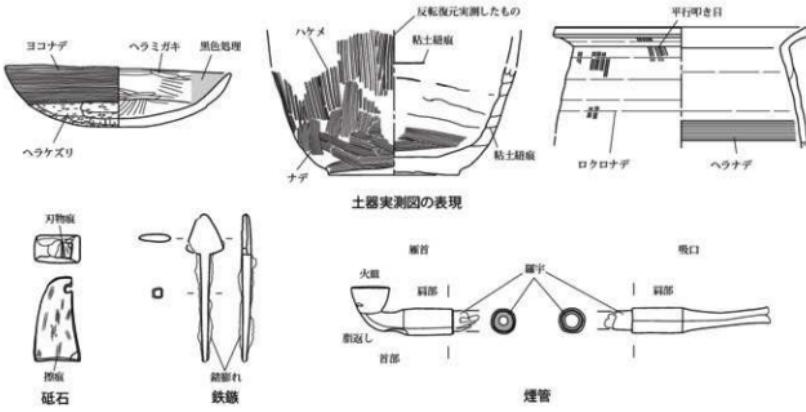
例 言

1. 本書は仙台少年鑑別所の庁舎新築工事に伴い実施された、南小泉遺跡第61次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の委託を受け、株式会社四門仙台支店が行なった。
3. 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課、荒井格・熊谷敏哉の監理のもとに、株式会社四門仙台支店 関根信夫・佐藤公保が担当した。本書の執筆は、熊谷が第1章を、関根が第2~4章、第5章4~7、第6章4、まとめを、佐藤が第5章1~3、8、第6章1~3を行なった。
4. 調査及び報告書作成にあたり、下記のデジタル機器・ソフトウェアを使用した。

測量・遺構計測	遺構くん	(株式会社 CUBIC)
遺構図・遺物実測図編集	photoshop・illustrator	(Adobesystems)
報告書編集・作成	InDesign	(Adobesystems)
	Word・Excel	(Microsoft)
5. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、宮城刑務所・仙台少年鑑別所よりさまざまな協力を賜った。記して謝意を表す次第である。
6. 近世の出土遺物に関して、立正大学博士課程中野光将氏から御指摘・御助言をいただいた。
7. 石製品の石材鑑定は東北大学名誉教授 蟹澤聰史氏にお願いした。
8. 発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書の土色は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局2001年版）に準拠している。
2. 本書中の第2章第1図は国土地理院発行の5万分の1地形図「仙台」を使用した。
3. 図中のグリッド値は、日本測地系座標を使用して示した。
4. 本文図版等で使用した方位はすべて座標北を基準としている。
5. 標高値は海拔高度（T.P.）を示す。
6. 遺構図は縮尺1/60を基本とした。その他、各図のスケールを参照されたい。
7. 基本層の表記はローマ数字を用いた。
8. 遺構名の略号は、SI：竪穴住居跡、SB：掘立柱建物跡、SD：溝跡、SK：土坑・墓壙、SX：性格不明遺構、SR：自然流路跡、P：ピットを使用した。
9. 調査区・遺構の面積は測量用ソフトを使用して算出した。
10. 遺構の主軸方位は、カマドの確認できる竪穴住居跡はカマドに平行した壁方位を主軸方位とし、その他の遺構に関しては長軸および長軸と想定される方位を主軸方位とした。
11. 竪穴住居跡の断面図では、床面・底面及びカマド使用面は太線とし、掘方は細線とした。
12. 遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。
A：繩文土器、C：土師器（非ロクロ）、D：土師器（ロクロ）、E：須恵器、F：丸瓦、
G：平瓦、I：陶器、K：石製品、N：金属製品、P：土製品、X：その他
13. 遺物実測図は原則として土器1/3、金属製品1/2、古銭2/3で表示した。その他、各図のスケールを参照されたい。
14. 遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線で表した。中心線が一点鎖線のものは、転回し、図上復元したものである。内面黒色処理を施したものについては、トーンを一部にかけた。



目 次

序 文 例 例 凡 例

第1章 調査概要	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査要項	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
第3章 調査の方法と経過	3
1. 調査区の設定	3
2. 調査の方法	3
3. 調査経過	4
第4章 基本層序	4
第5章 検出された遺構と遺物	7
1. 積穴住居跡	7
2. 掘立柱建物跡	15
3. 溝跡	18
4. 土坑・近世墓	21
5. 性格不明遺構	34
6. 自然流路跡	35
7. ピット	35
8. その他の出土遺物	35
第6章 遺構・遺物の検討	36
1. 弥生時代以前	36
2. 古墳時代	36
3. 平安時代	36
4. 近世	38
まとめ	40
引用参考文献	40
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)	2	第14図 SD 1～7溝跡平面図	17
第2図 南小泉遺跡第61次調査区位置図	3	第15図 SD 1～7溝跡断面図	18
第3図 遺構配置図	5	第16図 SD 8・9溝跡平面図・断面図	19
第4図 調査区壁断面図	6	第17図 SD 5・8溝跡出土遺物	19
第5図 SI 1 積穴住居跡平面図・断面図(1)	8	第18図 SK 1・2土坑平面図・断面図	20
第6図 SI 1 積穴住居跡平面図(2)	9	第19図 近世墓群(SK 3～23)平面図	21
第7図 SI 1 積穴住居跡出土遺物	10	第20図 SK 3墓壇平面図・断面図・出土遺物	22
第8図 SI 2 積穴住居跡平面図・断面図(1)	11	第21図 SK 4墓壇平面図・断面図・出土遺物	23
第9図 SI 2 積穴住居跡平面図(2)	12	第22図 SK 5墓壇平面図・断面図・出土遺物	23
第10図 SI 2 積穴住居跡出土遺物(1)	13	第23図 SK 6墓壇平面図・断面図・出土遺物	24
第11図 SI 2 積穴住居跡出土遺物(2)	14	第24図 SK 7墓壇平面図・断面図・出土遺物	24
第12図 SB 1 掘立柱建物跡平面図・断面図(1)	15	第25図 SK 8墓壇平面図・断面図・出土遺物	25
第13図 SB 1 掘立柱建物跡断面図(2)	16	第26図 SK 9墓壇平面図・断面図・出土遺物	26

第 27 図 SK10 墓壙平面図・断面図・出土遺物	26	第 34 図 SK16 墓壙平面図・断面図・出土遺物	32
第 28 図 SK11 墓壙平面図・断面図・出土遺物	28	第 35 図 SK17 墓壙平面図・断面図	32
第 29 図 SK12 墓壙平面図・断面図・出土遺物	28	第 36 図 SK18 墓壙平面図・断面図	32
第 30 図 SK13・14 墓壙平面図・断面図	29	第 37 図 SK19 墓壙平面図・断面図・出土遺物	33
第 31 図 SK13 墓壙出土遺物	29	第 38 図 SK20 墓壙平面図・断面図・出土遺物	33
第 32 図 SK14 墓壙出土遺物	30	第 39 図 SX 1～5 性格不明遺構平面図・断面図	35
第 33 図 SK15 墓壙平面図・断面図・出土遺物	30	第 40 図 その他の出土遺物	36

表目次

第 1 表 近世墓出土遺物数量表	38
第 2 表 遺物出土数量表	41
第 3 表 SI1・2 肩穴住居跡観察表	42
第 4 表 SB1 挖立柱建物跡観察表	42
第 5 表 SD1～9 溝跡観察表	42
第 6 表 SK1・2 土坑、SK3～23 墓壙観察表	42
第 7 表 SX1～5 性格不明遺構観察表	42
第 8 表 SRI 自然流路跡観察表	42
第 9 表 PI～42 観察表	42

図版目次

写真図版 1	45
写真図版 2	46
写真図版 3	47
写真図版 4	48
写真図版 5	49
写真図版 6	50
写真図版 7	51
写真図版 8	52
写真図版 9	53
写真図版 10	54
写真図版 11	55
写真図版 12	56

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

平成20年6月6日付けで、仙台少年鑑別所長松村利勝氏より、仙台市若林区古城三丁目27-1、17について、仙台少年鑑別所庁舎新築工事にかかる「仙台少年鑑別所新営工事計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」が提出された。

当該地は、南小泉遺跡の南西部に位置している。平成20年7月1日～4日に確認調査を実施した結果、建物建築範囲の北側で溝跡3条、土坑3基、ピット11、小溝状遺構9条、性格不明遺構1基が検出された。また、南北に延びる小溝状遺構および柱穴の可能性のあるピットから土師器、須恵器片が出土している。このことから、建物建設工事により地下遺構が損なわれるものと判断し、工事に先立って本発掘調査が必要である旨の回答を通知した。このため、仙台市教育委員会は仙台少年鑑別所と協議を行い、建築予定地北側の670m²を対象に、南小泉遺跡第61次発掘調査として、記録保存を図るために発掘調査を実施することになった。

2. 調査要項

遺跡名稱 南小泉遺跡（宮城県遺跡地名登録番号01021・仙台市文化財登録C-102）

所在地 宮城県仙台市若林区古城三丁目27-1、17

調査原因 仙台少年鑑別所庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）

調査担当 調査係主査 荒井 格

調査係文化財教諭 熊谷 敏哉

調査員 関根 信夫（株式会社四門 仙台支店）

調査補助員 佐藤 公保（株式会社四門 仙台支店）

計測員 佐々木 卓次郎（株式会社四門 仙台支店）

調査期間 平成21年7月20日～平成21年10月14日

調査面積 600m²

第2章 遺跡の立地と環境（第1図）

1. 遺跡の地理的環境

南小泉遺跡は、JR仙台駅の南東約3.5kmに位置する。仙台市若林区南小泉・遠見塚・古城・霞ノ目にまたがる地域を遺跡範囲とし、仙台バイパス道路を挟んで東西約2km、南北約1km、面積は約135haで仙台市内でも最大級の面積を有する遺跡である。

南小泉遺跡が位置する仙台市東部は「宮城野海岸平野」と呼ばれており、七北田川、名取川、広瀬川が運んできた土砂によって形成された沖積平野である。遺跡は広瀬川以北に広がる霞ノ目低地の平野部中央付近に位置する自然堤防上に立地している。今回の調査地点は遺跡範囲の南西に位置し、標高は11m前後である。

遺跡周囲に広く存在していた田畠は、都市計画道路の建設と急速な宅地化によって減少している。

2. 遺跡の歴史的環境

南小泉遺跡の歴史的認識は、昭和14年に行われた霞ノ目飛行場拡張工事の際に、弥生時代から古墳時代にかけての遺物、遺構の発見に端を発する。その後、氏家和典氏の編年によって東北地方の古墳時代中期における土師器の標識遺跡として認知されるようになった（氏家1957）。仙台市教育委員会は昭和52年から宅地造成や道路建設

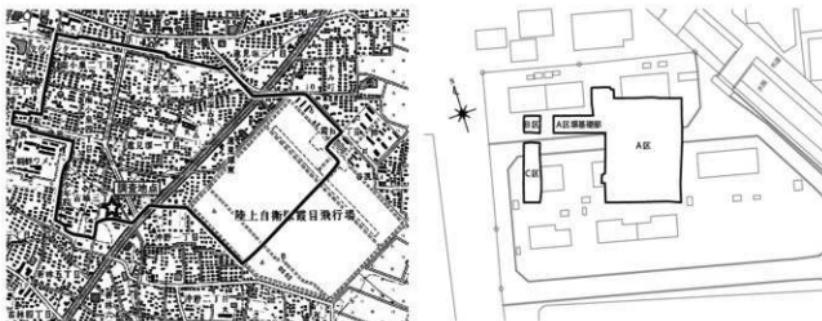


番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	南小泉遺跡	自然埋葬	縄文～近世	13	神橋遺跡	自然埋葬	古代
2	遠見塚古墳	自然埋葬	古墳(後期)	14	中藤西遺跡	自然埋葬	弥生・古墳・古代
3	若林城跡	自然埋葬	近世	15	片野城跡	自然埋葬	中世
4	美穂殿遺跡	自然埋葬	古代・中世・近世	16	仙台東郊条里跡	後背高地	古代
5	今泉遺跡	自然埋葬	弥生・古墳・奈良～近世	17	長町駅東遺跡	自然埋葬	弥生・古墳末・奈良初
6	法師塚古墳	自然埋葬	古墳(後期)	18	西ノ原遺跡	自然埋葬	縄文・弥生・古墳
7	蛇塚古墳	自然埋葬	古墳(後期?)	19	郡山遺跡	自然埋葬・後背高地	縄文後・魏・弥生中・古墳末・奈良初
8	掘塚古墳	自然埋葬	古墳(後期?)	20	大野田古墳群	自然埋葬	縄文・古墳・中世
9	陣屋町分寺跡	伸積平野	奈良・平安	21	大野田遺跡	自然埋葬	縄文～平安
10	陸奥国分尼寺跡	伸積平野	奈良・平安	22	大野田官衙遺跡	自然埋葬	奈良
11	砂押1遺跡	自然埋葬	古墳・古代	23	王ノ庵遺跡	自然埋葬	縄文・古墳中～末・奈良～平安・中世
12	砂押2遺跡	自然埋葬	古墳・古代	24	北日城跡	自然埋葬	縄文後・弥生～近世

第1図 南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

に伴う調査を開始し、これまでに 60 回を数える発掘調査が実施されている。調査の結果、第 17 次、19 次調査では縄文土器片が出土し、第 16 次調査で中・近世の遺構などが多く発見され、南小泉遺跡は弥生・古墳時代にとどまらず、縄文時代から近世に至るまで幅広い時代の遺構、遺物を包蔵していることが明らかになっている。

南小泉遺跡周辺では幾つかの古墳が知られている。なかでも、遺跡範囲のほぼ中央に位置する遠見塚古墳は、二段築成の前方後円墳で東北地方の古墳時代前期を代表する古墳である。主軸長は 110 m を測り、2 基の粘土櫛



第2図 南小泉遺跡第61次調査区位置図

を有している。他にも、円筒埴輪片が周溝から出土した若林城内古墳、横穴式石室が良好に残存している法領塚古墳、猫塚古墳など中期から後期の円墳がある。古墳時代の集落は第4次調査で初めて発見されており、中期の竪穴住居跡が5軒検出されている。

飛鳥時代に入ると、広瀬川以南の郡山低地では郡山遺跡や大野田官衙遺跡などで、官衙が造営されるようになる。それに伴い両遺跡の周辺域で集落が形成されるが、南小泉遺跡では7世紀後半の住居跡が一時的に減少する。

奈良時代初めには国府が郡山遺跡から多賀城に移され、8世紀半ば頃に南小泉遺跡の北方に国分寺、国分尼寺が建立される。平安時代の遺跡としては本遺跡の南方に神柵遺跡がある。9世紀代を中心とした竪穴住居跡のほか、掘立柱建物跡や掘立柱塙などによって構成される、最もしくは郷に関連した施設が発見されている。南小泉遺跡でも第22次、28次調査で古代の集落が発見されている。

中世では第16次調査などで城館跡や屋敷地、地割と考えられる溝跡が多く発見されている。

近世に入ると伊達政宗の隠居所として若林城が築城され、南小泉遺跡の西半部にあたる地域はその城下町として発展していく。寛永13(1635)年に政宗が没したのは若林城が廃城となり、当該地域は一部が仙台城の城下町に組み入れられ、他は小泉村の在郷分となっている。

第3章 調査の方法と経過

今回実施した発掘調査は、仙台少年鑑別所の庁舎新築工事に伴う事前調査である。調査地点の現状は仙台少年鑑別所の敷地内で、職員宿舎の跡地である。

1. 調査区の設定(第2図)

調査区は建物建設範囲の北半部(A区)とコンクリート塙建設範囲(A区塙基礎部・B区・C区)の位置に相当する。塙建設範囲には立ち木がかかるため、立ち木部分を残して設定することとした。調査区の設定は、宮城刑務所安住芳朗法務技官及び仙台市職員の立ち会いのもと、交点座標計算によって求めたA区北西角部と北東角部の2点を原点としてトータルステーションに任意座標として登録したのちに行った。調査区設定後に基準点測量を行い日本測地系の国家座標に位置づけている。原点の座標値は調査区北西角部がX=-196339.875、Y=6817.122、北東角部がX=-196345.641、Y=6835.260である。

調査面積はA区が約527m²、B区約16m²、C区約57m²の計600m²である。

2. 調査の方法

調査にあたっては、残土置き場を確保するためB・C区の調査を先行して行い、調査終了後に両調査区を埋め

戻し、その後A区の調査を行うこととした。図面の作製は、平面図及び地形測量をトータルステーションによる三次元計測によって行い、土層断面図は主として手実測により作製した。また、土層断面図の一部と遺物出土状況微細図などではデジタルカメラによる写真計測も併用した。写真は35mmリバーサル・モノクロフィルム及びデジタルカメラを使用した。調査区全景の写真的撮影は、ローリングタワー及びスカイマスターを用いて行った。

3. 調査経過

調査区設定を7月28日に行い、翌29日から重機を搬入して外周柵を設置した。7月30日から重機によってA区基礎部・B区・C区の表土掘削を行い、8月3日から遺構検出作業を開始した。8月21・22日でB区・C区の調査が完了した。両調査区を埋め戻したのち、8月24日からA区の重機掘削を行った。A区北西隅で発見したSI2竪穴住居跡は、当初の調査範囲では遺構の南東部分のみ検出された状態であったため、9月10日に仙台市教育委員会と打合せを行い、9月14日に重機を搬入して調査区を拡張し、遺構全体を検出した。10月7日にA区の完掘全景写真をスカイマスターを使用して撮影した。その後、10月14日までに調査区の埋め戻し、ブレハブ・外周柵の撤去を完了し、調査を終了した。

第4章 基本層序(第4図)

調査区が位置する範囲はシルト質の土壤が主体となっている。表土(I層)の下に職員宿舎建設に伴う盛土(II層)が一部で確認され、盛土直下には宿舎建設前の耕作土(III層)が認められた。遺構検出面はIV層上面である。

I層：表土(層厚5～10cm) 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト

II層：盛土(層厚10～75cm) 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト

III層：近世以降の耕作土(層厚10～55cm) 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト

IV層：IV a～IV c層の3層に細分される。

IV a層(層厚30～50cm) 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト

IV b層(層厚20～30cm) 10YR6/3 にぶい黄橙色 粘土質シルト

IV c層(層厚30～40cm) 10YR6/3 にぶい黄橙色 砂質シルト

V層：10YR7/3 にぶい黄橙色 シルト質粘土

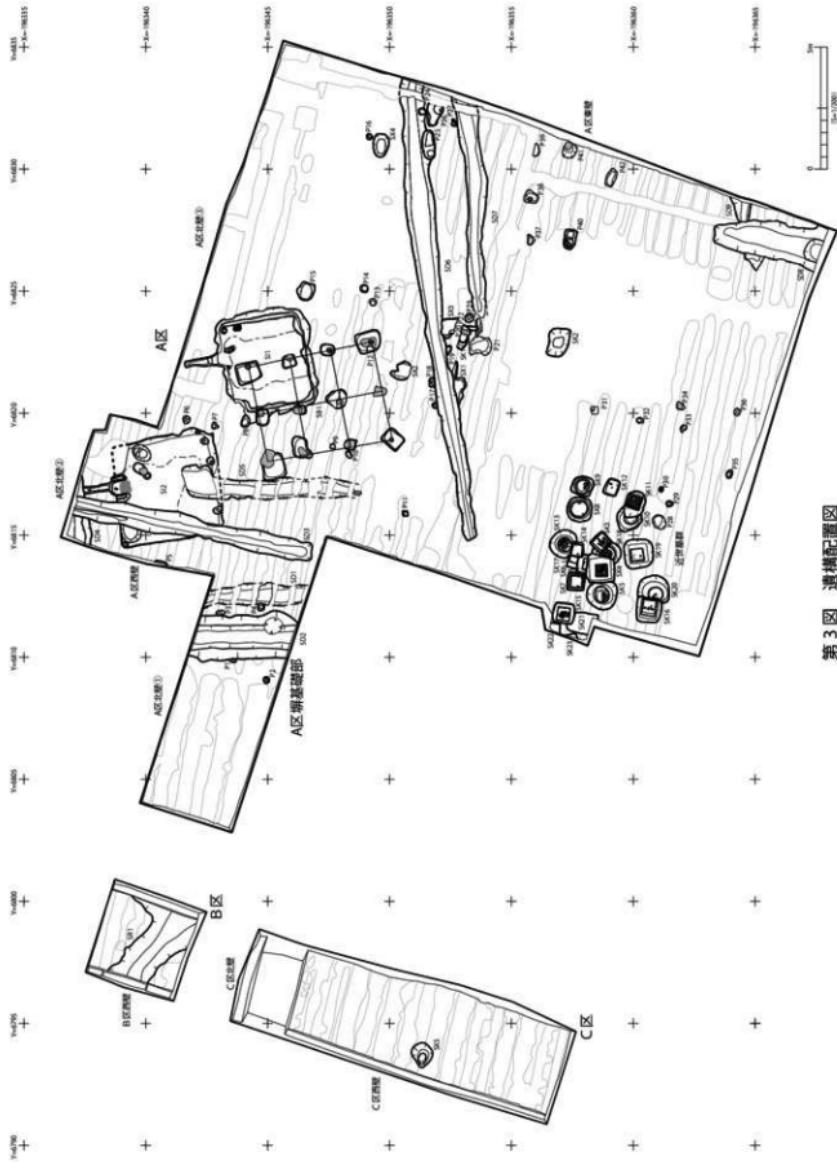
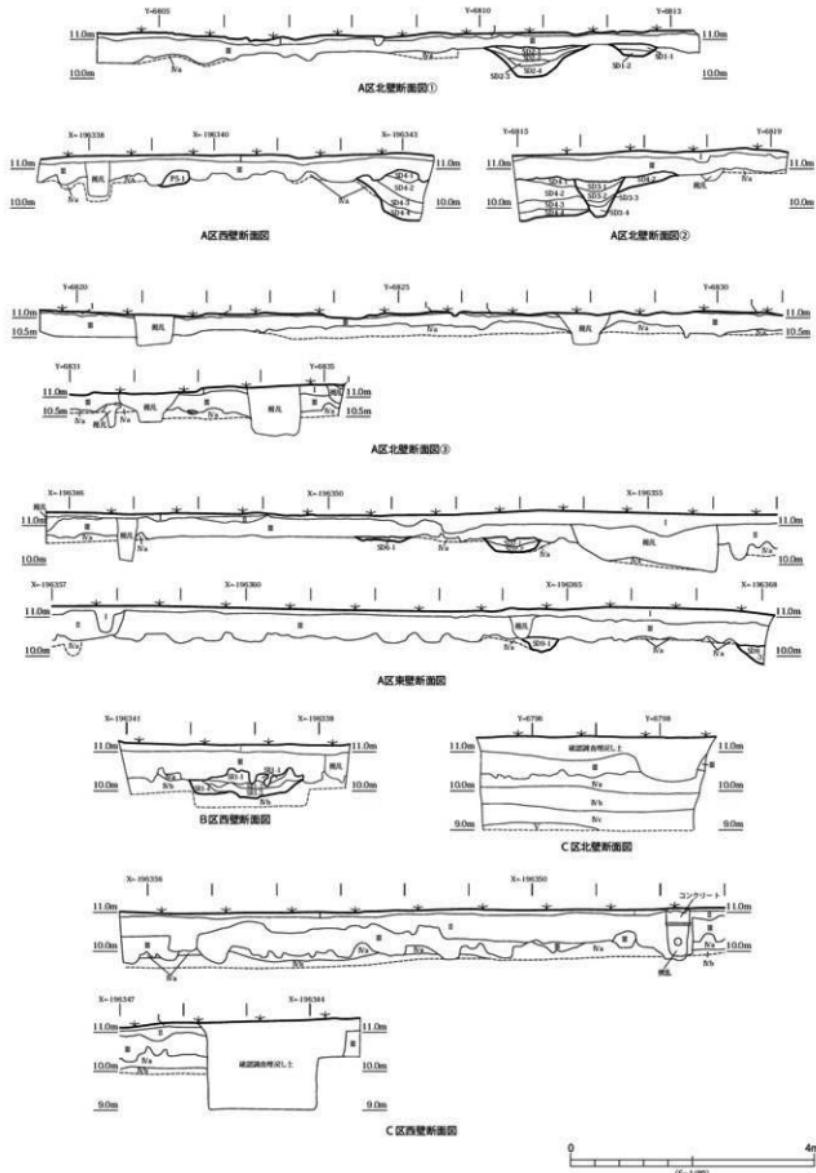


図3 遺構配置



第4図 調査区壁断面図

第5章 検出された遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 9 条、土坑 2 基、近世墓 21 基、性格不明遺構 5 基、自然流路跡 1 条、ピット 42 を検出した。検出遺構の総数は 83 である。

1. 竪穴住居跡

SIIA 竪穴住居跡（第 5・6 図）

A 区北側中央に位置する。SB1 掘立柱建物跡、P8 より古い。床面が 2 面確認されており、建て替えが行われている。古い段階を A 期、新しい段階を B 期とする。

SIIA 竪穴住居跡

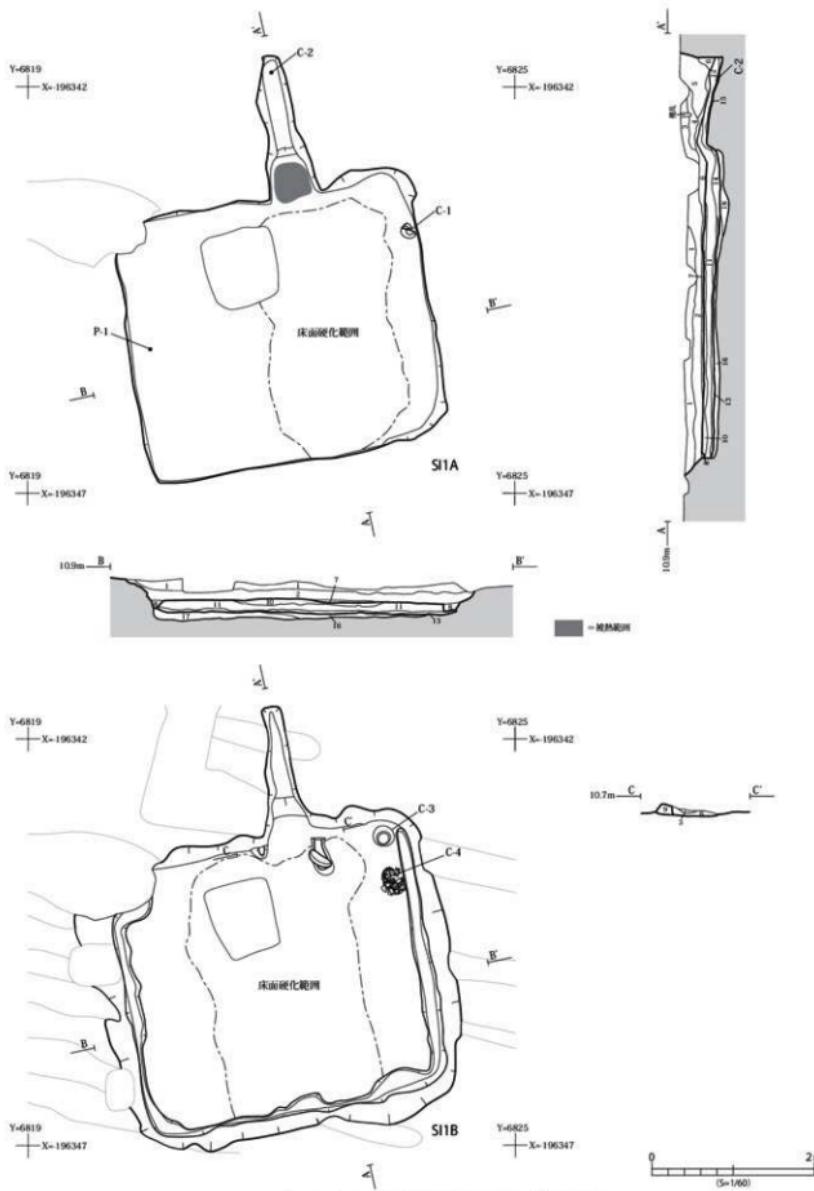
平面形は、北西隅が天地返しにより失われているが、方形と考えられる。規模は東西 3.75 m、南北 3.3m である。方向は東壁で N - 10° - W である。壁は床面から垂直気味に立ち上がる。壁高は最も残存している西壁で 20cm である。床面は東側の一部が掘り方底面である基本層 IV 層を床とし、それ以外は掘り方埋土（16 ~ 18 層）を貼床とする。カマドが敷設されている東半部分は他と比べて硬く締まっている。残存している床面積は 11.4 m² である。床面で柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは北壁中央やや東寄りに敷設され、燃焼部と煙道部が残存していたものの、袖は確認されなかった。燃焼部は幅 62cm、奥行き 64cm、煙道部は幅 19 ~ 46cm、長さ 1.2m である。SIIA 竪穴住居跡に伴う堆積土は、3 層（13 ~ 15 層）確認した。13 層は床面直上にみられる層厚 2 ~ 4cm の粘土質シルトで、締まりは弱い。14 ~ 15 層はカマド内堆積土で、炭化物と焼土を多量に含む。16 ~ 18 層は貼床・掘り方埋土である。掘り方は、部分的に窪んでいるが、底面の凹凸が少なくほぼ平坦である。

遺物は床面から土錘が 1 点出土している。掘り方から土師器の壺・甕、須恵器の壺、土錘等が 6 点、堆積土からは土師器の壺・甕が 5 点出土している。このうち非ロクロ調整土師器の壺 2 点、須恵器の壺 1 点、土錘 1 点を図化した（第 7 図）。C-1・2 は土師器の壺で、C-1 は平底に近い有段丸底のものである。C-2 は有段丸底で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。P-1 はほぼ完形の管状土錘である。E-1 は須恵器の壺である。須恵器は A・B 期含めても 2 点しか出土していない。

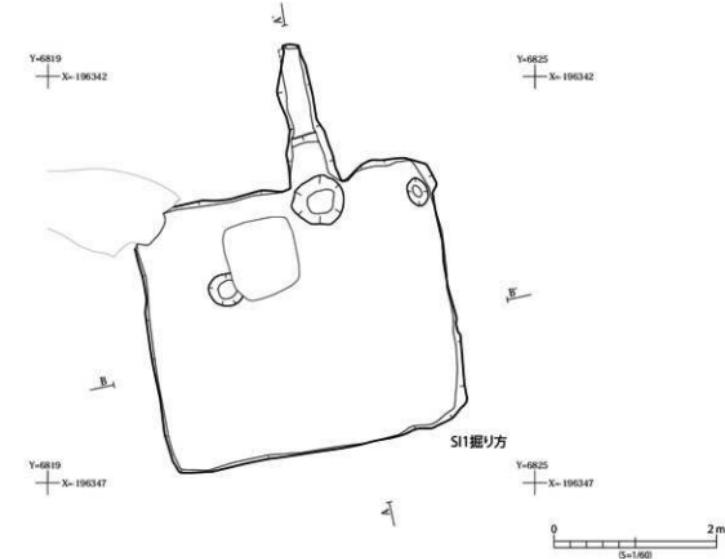
SIIB 竪穴住居跡

平面形は A 期と同様に、方形と考えられる。規模は東西 4.26 m、南北 3.6m で、A 期より若干拡張されている。方向は東壁で N - 10° - W である。壁は北壁では床面から垂直気味に立ち上がっているが、それ以外は緩やかであり、北壁以外の壁は崩壊したものと考えられる。壁高は最も残存している北壁で 24cm である。床面は全面貼床から成る。床の中央部分は他と比べて硬く締まっている。残存している床面積は 12.1m² である。床面で周溝を確認したが、柱穴は確認されなかった。周溝は北辺を除く 3 辺で確認され、上幅 6 ~ 30cm、下幅 4 ~ 18cm、深さ 4 ~ 9cm である。A 期と同位置にカマドが敷設され、底面と側壁を貼り直している。カマドは燃焼部と煙道部および袖が確認され、燃焼部は幅 55cm、奥行き 81cm、煙道部は幅 22 ~ 36cm、長さ 1.36m である。袖は一部残存しており、東側の袖は河原石を構築材として使用している。SIIIB 竪穴住居跡に伴う堆積土は 8 層（1 ~ 8 層）確認された。1・2 層は煙道部を除き、ほぼ全体に分布しており、2 層は IV 層ブロックを多量に含む。3 ~ 6 層はカマド内堆積土で、カマドの崩落土と炭化物・焼土を多く含んでいる。7 層は床面直上にある層厚約 2cm の粘土質シルトで、住居の中央付近でのみ確認された。締まりは弱く、A 期の 13 層に類似する。8 層は周溝堆積土である。9 層はカマド構築土である。10・11 層は貼床・掘り方埋土である。これらを除去すると SIIA 竪穴住居跡の堆積土が現れる。掘り方の底面はほぼ平坦である。

遺物は床面から土師器の甕が 4 点出土している。掘り方から土師器の壺・甕が 18 点、堆積土からは土師器の壺・甕、須恵器の壺、砥石、鎌、土錘、焼成粘土塊等が 68 点出土している。このうち非ロクロ調整土師器の壺



第5図 SI1 竪穴住居跡平面図・断面図(1)



番号	土色	土性	器人物・発考
1	灰褐色(10YR4/2)	シルト	瓦礫ブロック・陶器陶片・埴土を少額含む。 SII 壁面・床面・柱頭部・窓枠部・埴土を含む。
2	灰褐色(10YR4/2)	シルト	瓦礫ブロックを多額含む。灰褐色は灰褐色・埴土を含む。 SII の内壁・柱頭部。
3	灰褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	瓦礫ブロックを多額含む。灰褐色は灰褐色・埴土を含む。 SII の内壁・柱頭部。
4	灰褐色(2.5YR4)	粘土質シルト	粘土質シルト SII のカマド内壁。
5	灰褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	瓦礫ブロック・陶器陶片・埴土・地土を多額含む。 SII のカマド内壁。
6	灰褐色(10YR4/3)	シルト	粘土質シルト SII 壁面・床面・柱頭部・窓枠部を少額含む。
7	褐色(10YR4/1)	粘土質シルト	瓦礫を少額含む。厚さ 2cm 程度の底の時、 中間部に分厚する。SII 壁面の内壁。
8	灰褐色(10YR4/6)	粘土質シルト	SII 内壁。
9	灰褐色(10YR4/3)	シルト	瓦礫ブロックを多額、灰褐色・埴土を少額含む。 SII のカマド内壁。

番号	土色	土性	器人物・発考
10	浅黄色(2.5YR7/4)	粘土質シルト	灰褐色のシルトブロックを含む。灰褐色 は灰褐色のシルトブロックを含む。灰褐色・埴土を少額 含む。SII の内壁。
11	灰褐色(10YR6/6)	粘土質シルト	灰褐色のシルトブロックを含む。灰褐色・埴土を少額 含む。SII の内壁。
12	灰褐色(10YR6/6)	粘土質シルト	灰褐色のシルトブロックを含む。灰褐色・埴土を少額 含む。SII の内壁。
13	灰褐色(10YR4/2)	シルト	灰褐色・灰褐色・埴土を少額含む。厚さ 2~4cm 程 度の底より中間部、SII の内壁。
14	灰褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	灰褐色・灰褐色を多額含む。SII の内壁。
15	灰褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	灰褐色・灰褐色を多額含む。SII の内壁。
16	浅黄色(2.5YR7/4)	粘土質シルト	灰褐色のシルトブロックを少額含む。灰褐色は灰褐色 のシルトブロックを少額含む。SII の内壁・断面理。
17	黒色(10YR3/2)	粘土質シルト	灰褐色のシルトブロックを少額含む。SII の内壁・断面理。
18	灰褐色(10YR7/4)	粘土質シルト	灰褐色を少額含む。SII の内壁。

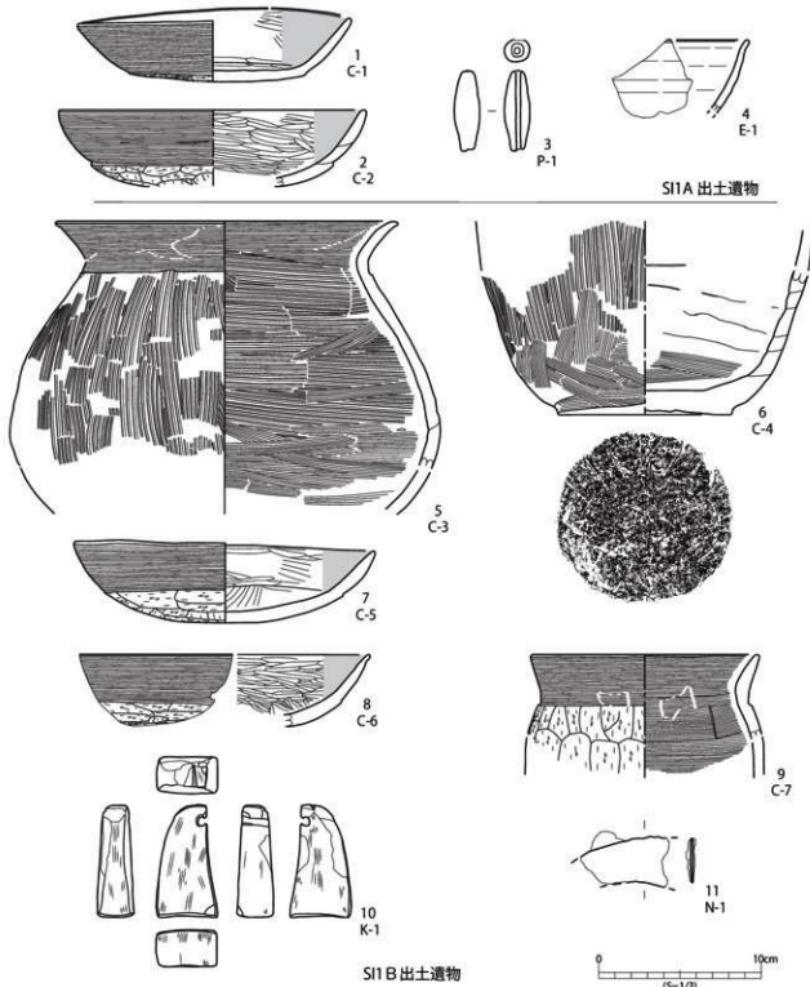
第6図 SII 穴式住居跡平面図(2)

2点、擴3点、砥石1点、鎌1点を図化した(第7図)。C-3・4は共に床面出土の土師器の擴である。C-3は球胴甕とも呼ばれるもので、頸部に段を持ち、体部の最大径が中位よりやや下にある。外面はハケメ調整、内面もハケメ調整され、下部にはナデが施される。C-4も外ハケメ調整、内ナデ調整されるが、内面には粘土紐痕が明瞭に残る。底部には木葉痕が見られ、中央部はナデ消されている。C-5・6は有段丸底の土師器の杯で、C-5は内弯気味に立ち上がり、内面の口縁部と体部の境にわざかな棱を持つ。C-6は内弯気味に立ち上がり、口唇部付近で外反する。C-7は小型の甕で、外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデが施される。カマド内堆積土より出土しており、被熱により全体が赤褐色を呈している。K-1はディサイトを用いた砥石で、砥面は6面ある。携帯や保持に関わると考えられる紐孔が見られるが、側面も使いこまれ、紐孔まで達している。頂部には刃物痕が確認される。N-1の鉄製品は全体的に錆びた状態であるが、緩やかに弯曲する形状と破断面の観察から鎌と考えられる。

SII 穴式住居跡の時期は、出土遺物からA・B期とも7世紀後半~末頃と考えられる。

SII 穴式住居跡(第8・9図)

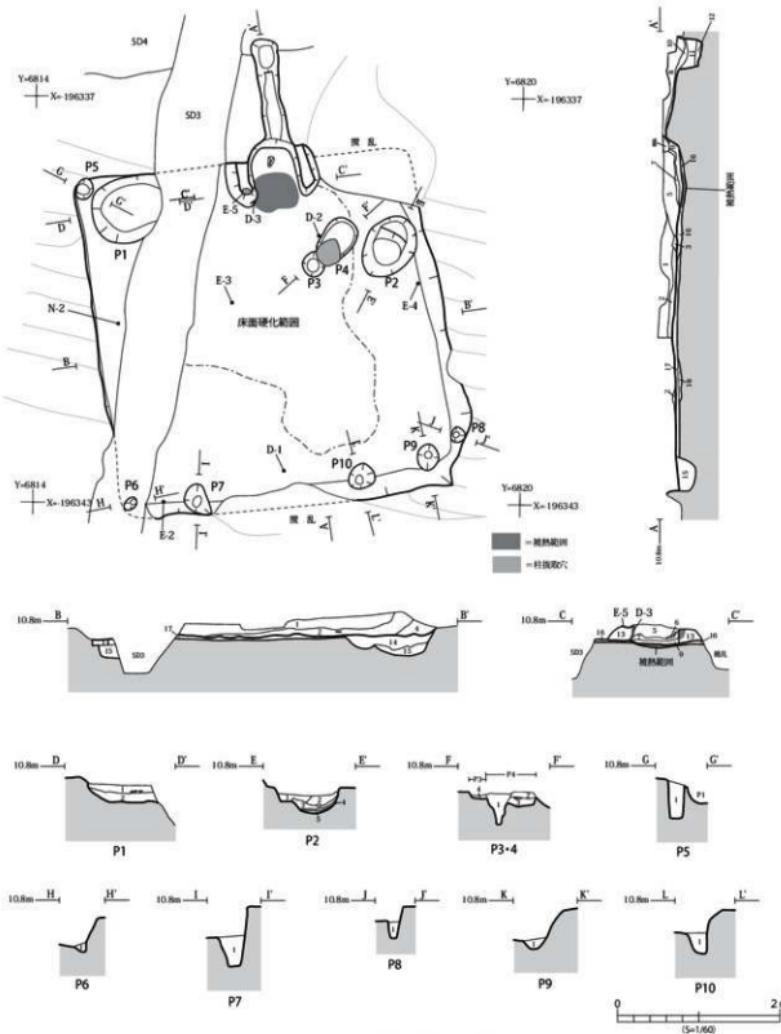
A区北西に位置する。SD3・4・5溝跡より古い。北東隅と南西隅は天地返しと搅乱によって失われているが、平面形は方形と考えられる。規模は東西 4.30m、南北 4.19 mである。方向は西壁で N - 9° - W である。壁は



S11B 出土遺物

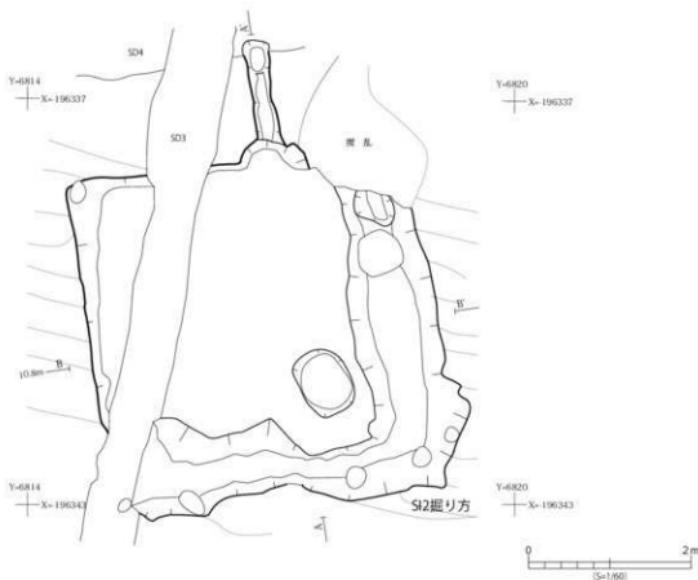
測定番号	種別・器形	出土場所	通鑑名	出土層位等	高さ	口径	底径	壁厚	特徴	特徴	写真	回数
1	C-1 土師陶片(口) 破	AK	S11A	13層	4.55	16.6	-	-	外面：1)縦部ヨコナデ、縁一部ハラケズリ 内面：ハラミガキ。黒色施塗	-	10-1	
2	C-2 土師陶片(口) 破	AK	S11A	15層	(4.7)	(18.8)	-	-	外面：1)縦部ヨコナデ、縁一部ハラケズリ 内面：ハラミガキ。黒色施塗	-	10-2	
3	P-1 土師片 土器	AK	S11A	床面以上	5.0	1.55	-	-	外底：ナゲ 孔Φ0.4cm 重0.2g	-	10-3	
4	E-1 瓦器部 环	AK	S11A	17層	(4.8)	-	-	-	内面面：ロクロナデ	-	10-4	
5	C-3 土師陶片(口) 破	AK	S11B	床面以上	(18.0)	(20.7)	-	-	外面：1)縦部ヨコナデ、体部ハケナメ 内面：1)縦部ヨコナデ、体部ハケナメ、ナゲ	-	10-5	
6	C-4 土師陶片(口) 破	AK	S11B	床面以上	(11.9)	-	-	-	外底：ナゲ、体下部ナゲ、底部水窪跡、ナゲ 内面：ナゲ	-	10-6	
7	C-5 土師陶片(口) 破	AK	S11B	2層	5.1	18.4	-	-	外面：1)縦部ヨコナデ、縁一部ハラケズリ 内面：ハラミガキ。黒色施塗	-	10-7	
8	C-6 土師陶片(口) 破	AK	S11B	6層	(4.4)	-	-	-	外面：1)縦部ヨコナデ、縁一部ハラケズリ 内面：ハラミガキ。黒色施塗	-	10-8	
9	C-7 土師陶片(口) 破	AK	S11B	8層	(7.6)	(13.8)	-	-	外面：1)縦部ヨコナデ、体部ハラケズリ 内面：ハラミガキ。黒色施塗	-	10-9	
10	K-1 石製品 砕石	AK	S11B	堆積土	6.9	3.8	2.25	0.15	範例6個、破孔有り 重量：72.8g 石材：ダイサイト	-	10-10	
11	N-1 金屬製品 銀	AK	S11B	8層	(5.45)	(3.1)	0.15	材質：銀	-	-	10-11	

第7図 S11 積穴住居跡出土遺物



第8図 SI2 竪穴住居跡平面図・断面図(1)

床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も残存している西壁で31cmである。床面は全面貼床から成る。中央部からカマド付近にかけての部分は他と比べて硬く縮まっている。床面積は15.3m²である。床面では10のピットを確認した。P1・2は貯蔵穴の可能性がある。P4・7・10は位置関係と規模から主柱穴と考えられ、P7・10は南壁に沿って設けられている。4本柱と想定され、北西隅の柱穴はSD3溝跡の掘り込みで失われている。主柱穴が壁際に設けられる構造の竪穴住居跡は大崎市野崎遺跡SI2A・3・15竪穴住居跡(大崎市教委2008)に類似する。



SII2

組別	土色	土性	鉱人物・届考
1	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・粘土を多量含む。石炭層・炭化物を少量含む。
2	褐褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物・粘土を多量含む。石炭層・炭化物・礫土を少量含む。柱3脚の基礎土。
3	褐色(10YR4/6)	粘土質シルト	炭化物・礫土を少量含む。柱基礎の道筋土。
4	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	炭化物・粘土を多量含む。柱基礎の道筋土。
5	灰褐色(10YR4/3)	シルト	石炭層・炭化物・礫土・焼成粘土層を少量含む。カマド内複数層。
6	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	石炭層を少量含む。カマド内複数層。
7	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物・粘土・柱・礫土・焼成粘土層・柱基礎を少量含む。カマド内複数層。
8	褐褐色(10YR3/4)	シルト	礫土を少量含む。カマド内複数層。
9	褐褐色(10YR4/4)	シルト	礫土・炭を少量含む。カマド内複数層。

組別

組別	土色	土性	鉱人物・届考
10	褐褐色(10YR3/3)	シルト	礫土を少量含む。カマド内複数層。
11	褐褐色(10YR3/4)	シルト	石炭層・プロック・礫土を少量含む。カマド内複数層。
12	褐褐色(10YR3/4)	シルト	石炭層・プロック・礫土を少量含む。カマド内複数層。
13	褐褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物・シルト・プロックを少量含む。カマド内複数層。
14	褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	石炭層・プロック・礫土を少量含む。カマド内複数層。
15	褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	石炭層・プロックを少量含む。炭化物・礫土を少量含む。カマド内複数層。
16	褐褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	石炭層・プロック・炭化物・礫土を少量含む。
17	(K)色(2.5YR5/1)	粘土質シルト	石炭層・プロックを少量含む。縞まりは複数。礫土している。炭化物・礫土を少量含む。
18	褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	石炭層・プロックを少量含む。縞まりは複数。

SII2-P1

組別	土色	土性	鉱人物・届考
1	褐褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	石炭層・炭化物・礫土を多量含む。
2	褐褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	石炭層・プロックを多量含む。

SII2-P3・4

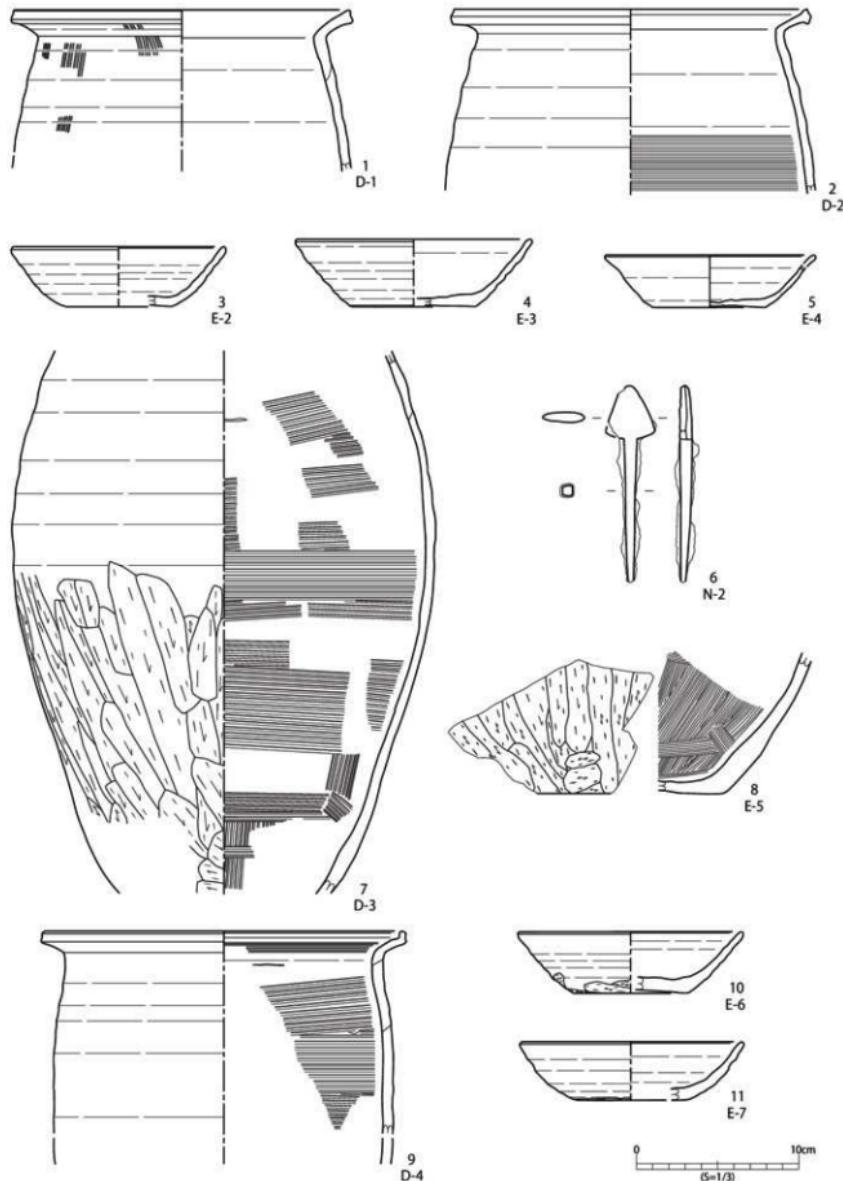
組別	土色	土性	鉱人物・届考
1	褐褐色(10YR4/1)	粘土質シルト	石炭層・炭化物・礫土を含む。P4斜面燃焼帯。
2	褐褐色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物の上にシルト・プロックを含む。礫土を少量含む。P4斜面燃焼帯。
3	褐褐色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物・礫土を多量含む。P3斜面燃焼帯。
4	褐褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	炭化物・礫土を多量含む。P3斜面燃焼帯。

SII2-P5~10

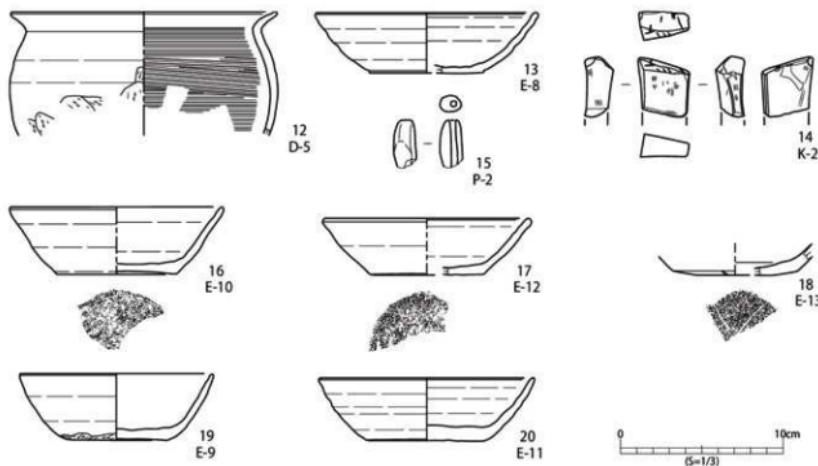
組別	土色	土性	鉱人物・届考
1	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	石炭層・炭化物・礫土を少量含む。

第9図 SII2 積穴住居跡平面図(2)

例がある。P5・6・8・9は主柱穴を補助する役割を果たした柱穴の可能性がある。P3の性格は不明である。周溝は確認されなかった。カマドは北壁中央やや東寄りに敷設されており、燃焼部および煙道部を確認した。煙道部の先端はピット状である。燃焼部は幅54cm、奥行き70cm、煙道部は幅27~32cm、長さ1.34mである。カマドの西側の袖にはロクロ調整土師器の裏(D-3)と須恵器の裏(E-5)が構築材として使用され、燃焼部内には石製支脚が残存していた。堆積土は12層に分かれる。1~4層は住居内堆積土、5~12層はカマド内堆積土で、炭



第10図 SI2 穫穴住居跡出土遺物 (1)

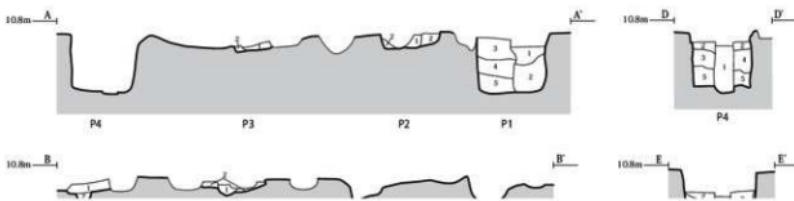
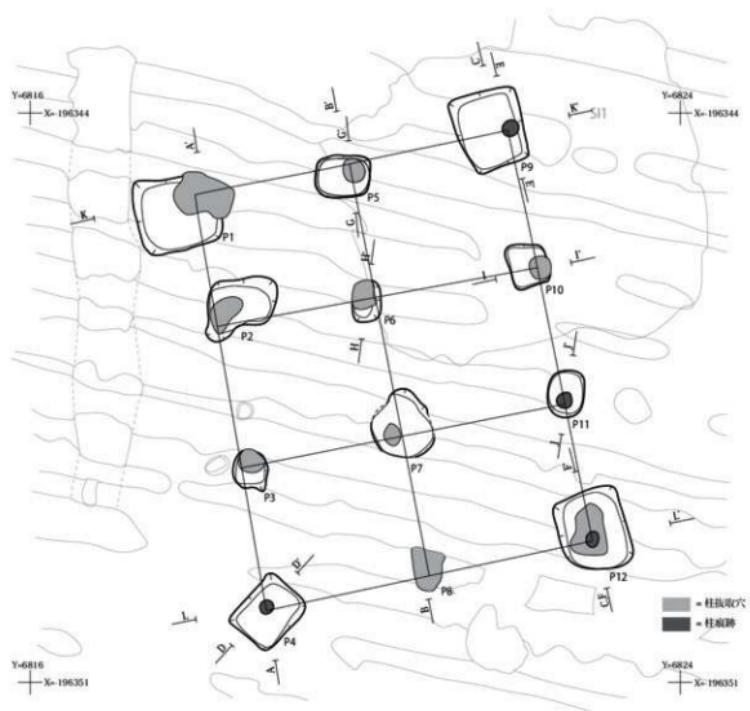


図中 番号	目録 番号	種別・器種	出土 地名	遺物名	出土位数	最高 長	U層 厚	底盤 厚	特徴	年 代	
1	D-1	土師器(ロクロ)	窓	AJK	S2	床面直上	(0.0)	(20.0)	-	外側：平行叩きのちロクロナデ 内面：ロクロナデ	10-12
2	D-2	土師器(ロクロ)	窓	AJK	S2	床面直上	(0.4)	(21.7)	-	外側：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、下部斜面へラナデ	10-13
3	E-2	土師器 环	窓	AJK	S2	床面直上	3.7	(13.0)	外側：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底部切り離し不規のちラグ	10-14	
4	E-3	土師器 环	窓	AJK	S2	床面直上	4.15	(14.4)	外側：ロクロナデ、底部切り離し不規のちラグ	10-15	
5	E-4	土師器 环	窓	AJK	S2	床面直上	3.2	(12.8)	外側：ロクロナデ、底部切り離し不規のちラグ	10-16	
6	N-2	金銅製品 鉄鑿	窓	AJK	S2	床面直上	(1.2)	(2.9)	外側：鉄、表面：207g	10-17	
7	D-3	土師器(ロクロ)	窓	AJK	S2	カマド下	(33.5)	-	外側：ロクロナデ、下部へラケズリ	カマド構造材	10-19
8	E-5	土師器 窓	窓	AJK	S2	カマド下	(8.7)	-	外側：ヘラケズリ	カマド構造材	10-18
9	D-4	土師器(ロクロ)	窓	AJK	S2	P2	4.0	(4.3)	(22.0)	外側：ロクロナデ、内面：ロクロナデのちハケメ	10-20
10	E-6	土師器 环	窓	AJK	S2	P2	4.0	3.8	(13.7)	外側：ロクロナデ、内面：ロクロナデのちハケメ	10-21
11	E-7	土師器 环	窓	AJK	S2	P2	2.0	3.6	(13.0)	外側：ロクロナデ、底部下端へラケズリ、底部切り離し不規のち手持ちへラケズリ 内面：ロクロナデ	10-22
12	D-5	土師器(ロクロ)	窓	AJK	S2	振り方墻土	(7.0)	(16.2)	-	外側：ロクロナデ、底部下端へラケズリ 内面：床面ロクロナデ、体部へケズ	10-23
13	E-8	土師器 环	窓	AJK	S2	振り方墻土	3.75	13.6	(7.0)	外側：ロクロナデ、底部切り離し不規ロクロナデ	10-24
14	K-2	石製品 砕石	窓	AJK	S2	振り方墻土	(3.7)	3.1	1.8	裏面重複：20.4g 石材：ディヤイト	10-25
15	P-2	土師器 环	窓	AJK	S2	振り方墻土	(2.9)	1.4	-	外側：ナマ 砂質：0.4g 重量：3.9	10-26
16	E-10	土師器 环	窓	AJK	S2	7層	4.15	(13.0)	(7.0)	外側：ロクロナデ、底部切り離し不規ロクロナデ、底部外側埋め、底部内部埋め、SBDと接合	10-29
17	E-12	土師器 环	窓	AJK	S2	堆積土	3.5	(12.6)	(7.0)	外側：ロクロナデ、底部切り離し不規のちナダ、ヘラ削きあり	10-30
18	E-13	土師器 环	窓	AJK	S2	堆積土	(1.95)	-	(7.0)	外側：ロクロナデ、底部切り離し不規のちナダ、ヘラ削きあり 接合しないがE-14と同一側面	10-31
19	E-9	土師器 环	窓	AJK	S2	7層	4.1	11.8	6.2	外側：ロクロナデ、底部下端へラケズリ、底部切り離し不規のち手持ちへラケズリ 内面：ロクロナデ	10-27
20	E-11	土師器 环	窓	AJK	S2	堆積土	3.85	13.2	7.0	外側：ロクロナデ、底部内側へラケズリのちナダ 内外側により内外側とも厚壁	10-28

第11図 S12 穫穴住居跡出土遺物（2）

化物と焼土を含む。13層はカマド構築土である。14～17層は貼床・掘り方理土である。14～16層は黒褐色粘土質シルトであり、炭化物と焼土を含む。17層は灰白色粘土質シルトで、硬く締まっている。掘り方は北辺を除く周囲が溝状に掘り込まれ、中央部分は高く残されている。

遺物は床面から土師器の甕・須恵器の壺、鐵鑿が12点出土している。カマドから土師器の甕・須恵器の壺が6点、ピット内から土師器の甕・須恵器の壺・甕、焼成粘土塊等が56点、掘り方から繩文土器または弥生土器片、土師器の壺・甕・須恵器の壺・甕、砾石、土鍾等が126点、堆積土からは土師器の壺・甕・須恵器の壺・蓋・甕、砾石、鐵釘?等が231点出土している。土師器はロクロ調整されるものが多い。このうちロクロ調整土師器の甕5点、須恵器の壺11点・甕1点、砾石1点、鐵鑿1点、土鍾1点を図化した（第10・11図）。D-1は外面上平行叩きのち、ロクロナデが施される。平行叩き目は体部だけでなく口縁部でも確認される。D-2は内面ロクロナデのち体部下半がヘラナデ調整される。D-3・4は内面ロクロナデのちハケメ調整される。また、甕の口縁部形状にはバリエーションが認められる。須恵器の壺の底部切り離し技法はヘラ切りのものと、再調整され不



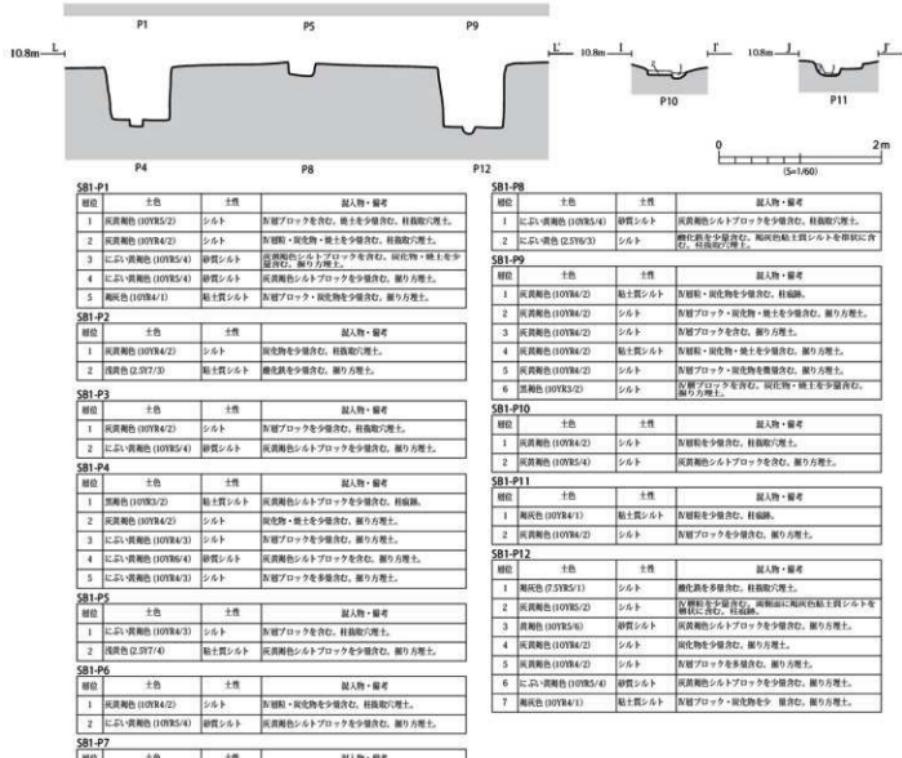
明な物が多く、糸切りはE-10のみである。また、E-10は内面の口唇部と底部に使用に起因すると考えられる磨滅がみられた。E-12には「—」、E-13には「×」の可能性のあるヘラ書きが底面にある。直上の天地返し土内からE-13と同一個体と考えられる須恵器环(E-14)が出土している。このほか、小破片のため図化できなかったものに、堆積土から出土した内面黒漆塗りの非ロクロ調整土師器の壺の口縁部がある(写真図版10-32)。

SI2 竪穴住居跡の時期は、出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

2. 据立柱建物跡

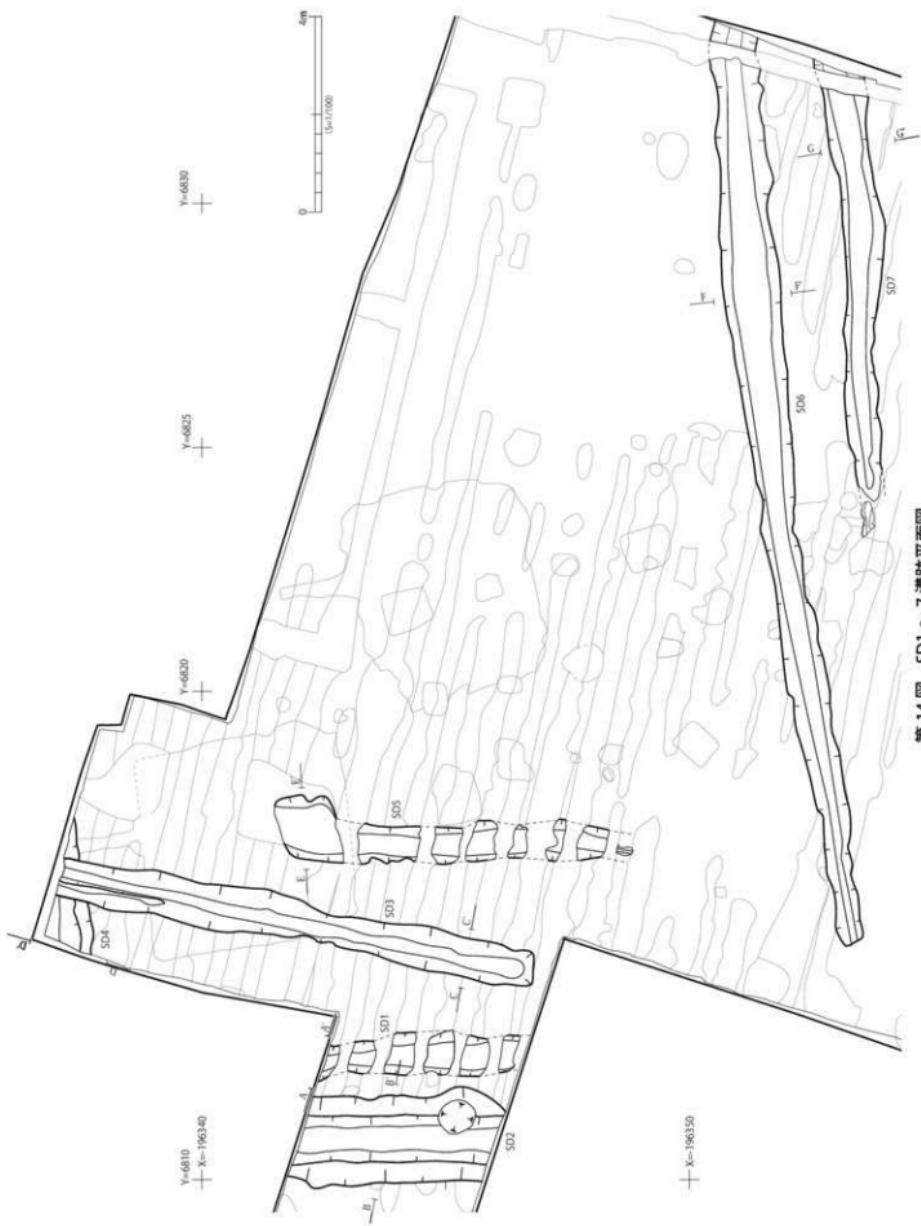
S11 据立柱建物跡(第12・13図)

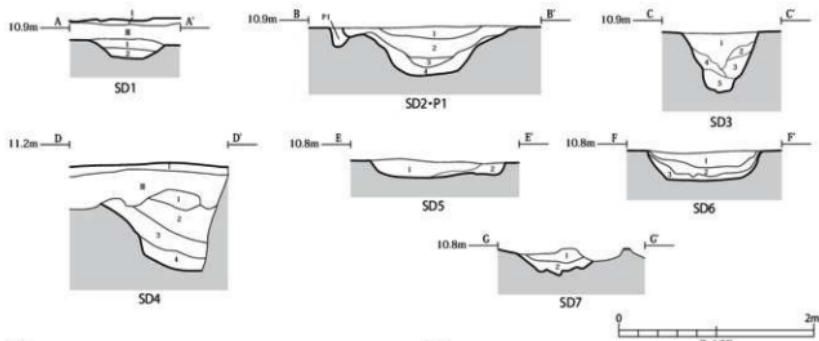
A区北側中央に位置する。S11 竪穴住居跡より新しい。桁行3間、梁行2間の南北棟の総柱建物である。規模は、桁行が東側柱列で総長5.17m、柱間寸法が北から178・167・172cmである。梁行が南側柱列で総長4.1m、柱間



第 13 図 SB1 挖立柱建物跡断面図 (2)

第14図 SD1～7溝跡平面図





SD1		
部位	土色	土性
1 黄褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	瓦礫和土を含む。赤灰色粘土質シルトブロックを少量含む。
2 にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	瓦礫和土を少量含む。

SD2・P1		
部位	土色	土性
1 黄褐色(7.5YR4/1)	シルト	瓦礫和・鐵化鉄を少量含む。SD2 連繩土。
2 黄褐色(10YR4/1)	粘土質シルト	瓦礫ブロックを少量含む。SD2 連繩土。
3 黄褐色(7.5YR4/1)	粘土質シルト	瓦礫和・鐵化鉄を少量含む。SD2 連繩土。
4 黄褐色(10YR4/2)	シルト	瓦礫和を多量含む。SD2 連繩土。
5 にぶい黄褐色(10YR4/2)	シルト	瓦礫和・鐵化鉄を少量含む。P1 連繩土。

SD3		
部位	土色	土性
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	瓦礫和・マンガンを少量含む。
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	瓦礫和・マンガンを少量含む。
3 黄褐色(10YR3/3)	シルト	瓦礫和・鐵化鉄を少量含む。
4 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	瓦礫ブロックを多量、マンガンを少量含む。
5 黄褐色(10YR3/3)	シルト	瓦礫ブロック・鐵化鉄・カルトブロック・マンガンを少量含む。

SD4		
部位	土色	土性
1 黄褐色(10YR3/2)	シルト	鐵化鉄を含む。瓦礫ブロック少量含む。
2 黑褐色(10YR3/2)	シルト	瓦礫ブロックを含む。鐵化鉄・焦土を少量含む。
3 黄褐色(10YR4/1)	シルト	鐵化鉄を含む。瓦礫ブロックを少量含む。
4 黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	鐵化鉄シルトブロックを含む。瓦礫ブロックを少量含む。

SD5		
部位	土色	土性
1 黄褐色(10YR5/1)	シルト	鐵化鉄を含む。燒土を少量含む。
2 黄褐色(10YR4/2)	シルト	瓦礫和・焦土を少量含む。

SD6		
部位	土色	土性
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	鐵化鉄・マンガンを少量含む。
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	鐵化鉄を含む。マンガンを少量含む。
3 黄褐色(10YR4/6)	砂質シルト	鐵化鉄シルトブロックを少量含む。

SD7		
部位	土色	土性
1 黄褐色(10YR3/4)	シルト	瓦石内粘土質シルトブロック・鐵化鉄・マンガンを少量含む。
2 黄褐色(10YR3/2)	シルト	瓦石内粘土質シルトブロックを含む。下部に鐵化鉄を帶状に含む。

第15図 SD1～7溝跡断面図

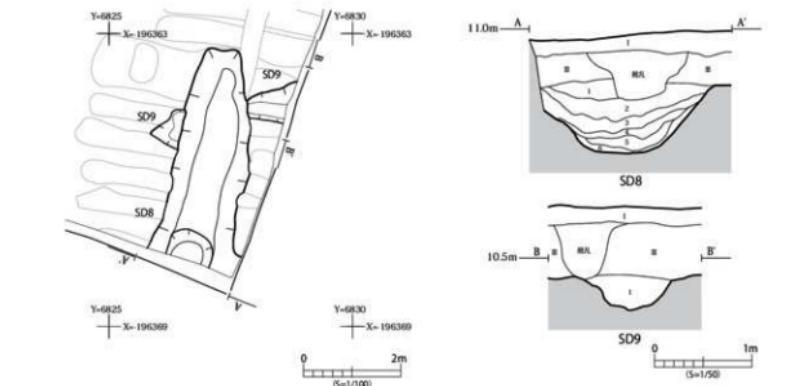
寸法は20cmである。方向は東側柱列でN - 11° - Wである。12基の柱穴を検出し、柱痕跡を4基、柱抜取穴を8基で確認した。四隅の柱穴(SB1-P1・4・9・12)は平面形が方形で一辺64～107cm、深さ65～90cmである。四隅の掘り方底面の標高は9.8～9.9mで、ほぼ同じ高さで描えられている。他の柱穴の平面形は方形または梢円形を呈しており、一辺28～81cm、深さ15～40cmで、四隅の柱穴と比べ規模が小さい。柱痕跡は直径15～20cmの円形である。四隅以外の柱穴は東柱のような役割を果たしていたと考えられる。

遺物は柱抜取穴から土師器の壺・甕、須恵器の壺・壺・甕等が35点出土しており、掘り方からは土師器の壺・蓋・甕、須恵器の壺・甕、土錐、焼成粘土塊等が148点出土している。小破片で図化できなかったものに、ロクロ調整土師器の甕(D-6・7)と須恵器の壺(E-15)がある(写真図版10-33～35)。D-6、E-15はP6の掘り方から出土し、E-15の底部切り離し技法は再調整され不明であるが、底部の形状はSI2 穏穴住居跡出土のE-8に類似する。D-7はP12の掘り方から出土し、外側調整は平行叩きのちロクロナデである。

3. 溝跡

SD1 溝跡(第14・15図)

A区断面基礎部東側に位置する。P4より古い。天地返しにより分断されているが、検出長は約4mで、調査区外の南北に続くと考えられる。方向はN - 3° - Wである。上幅67cm～88cm、下幅24～58cm、深さ11～14cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北から南に向かって緩やかに傾斜する。堆積



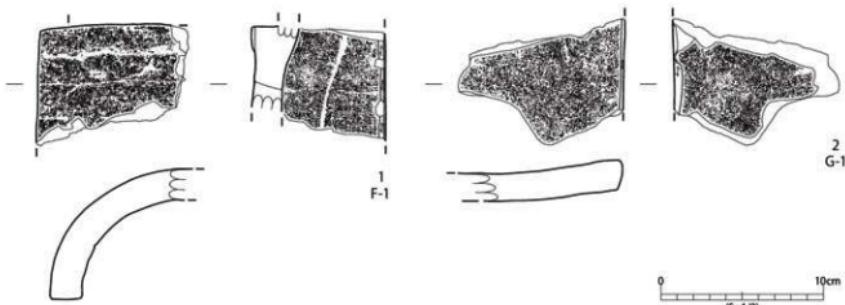
SD8

層位	土色	土性	記入物・備考
1	灰褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	瓦礫を少額含む。
2	黄褐色(10YR5/1)	粘土質シルト	瓦礫ブロックを少額含む。
3	灰褐色(10YR4/3)	砂質シルト	褐色粘土質シルトブロックを少額含む。

SD9

層位	土色	土性	記入物・備考
1	褐褐色(10YR3/4)	シルト	褐色粘土質シルトブロック・鰐化鉄・マンガンを少額含む。

第16図 SD8・9溝跡平面図・断面図



SD5

SD8

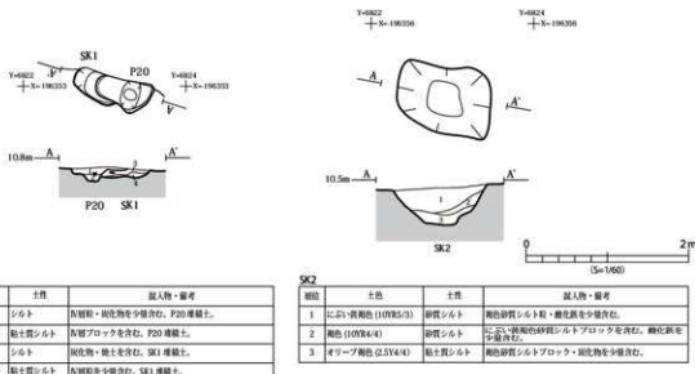
測定番号	種別・基標	出土地区	遺物名	出土位置等	最高 長	口径 幅	坑壁厚	特徴	写真 回数
1	F-1 瓦 瓦	ASK	SD5	1層	4.55	16.6	2.0	凹面:布目 凸面:網目きのちロクナデ 壁面:ヘラケズリ、ナデ	11.1
2	G-1 瓦 平瓦	ASK	SD8	堆積土下部	(4.7)	(18.8)	1.8	凹面:ナデ 凸面:ナデ 壁面:ヘラケズリ、ナデ	11.2

第17図 SD5・8溝跡出土遺物

土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SD2溝跡(第14・15図)

A区基礎部東側に位置する。P1・3より新しい。検出長は約4.4mで、調査区外の南北に続くと考えられる。方向はほぼ真北である。上幅173~191cm、下幅46~55cm、深さ46~48cmである。壁は底面から急角度で立ち上がり、中程度で段を持つ。底面はほぼ平坦で、傾斜は見られない。堆積土は4層に分かれる。堆積土から土師器の鉢・杯・甕、須恵器の杯・甕等が51点出土しているが、いずれも小破片のため、図化するまでにはいたらなかった。



第18図 SK1・2 土坑平面図・断面図

SD3溝跡(第14・15図)

A区北西に位置する。SI2竪穴住居跡、SD4溝跡より新しい。検出長は約10mで、南側で溝の立ち上がりを検出しておらず、調査区外の北に続くと考えられる。方向はN-11°-Eである。上幅53~87cm、下幅20~40cm、深さ45~61cmである。壁は底面から垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北から南に向かって傾斜する。堆積土は4層に分かれている。堆積土から土師器の甕、須恵器の壺・甕等が35点出土している。このうち回転糸切り無調整の須恵器の壺底部はSI2竪穴住居跡カマド内堆積出土の口縁部と接合した(E-10)。

SD4溝跡(第14・15図)

A区北西に位置する。SD3溝跡より古く、SI2竪穴住居跡より新しい。検出長は約2.8mで、調査区外の東西に続くと考えられる。方向はE-7°-Nである。上幅1m以上、下幅33cm以上、深さ79~84cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦で、傾斜は見られない。堆積土は4層に分かれている。遺物は出土していない。

SD5溝跡(第14・15図)

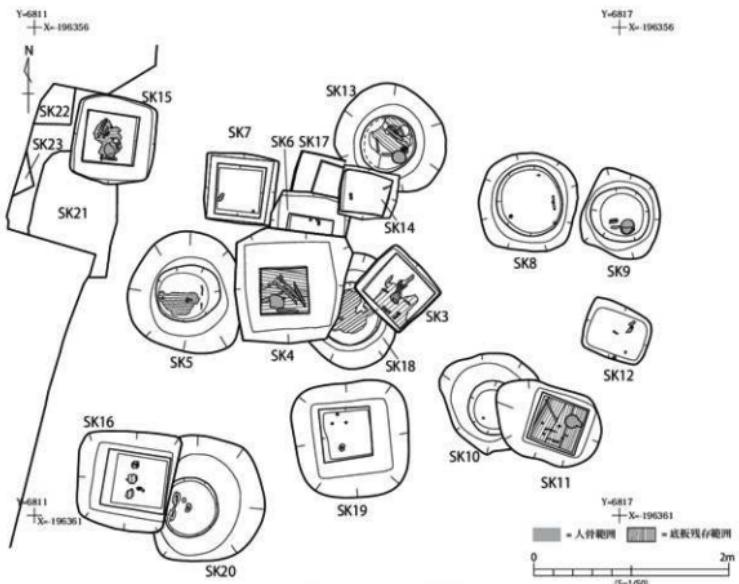
A区北西に位置する。SI2竪穴住居跡より新しい。天地返しにより分断されているが、検出長は約7.4mである。方向はN-2°-Eである。上幅17~133cm、下幅8~102cm、深さ10~18cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北から南に向かって緩やかに傾斜する。堆積土は2層に分かれている。堆積土から土師器の壺・甕、須恵器の壺、丸瓦等が30点出土している。このうち丸瓦1点を図化した(第17図)。F-1は玉縁付近の破片である。

SD6溝跡(第14・15図)

A区中央に位置する。SX1・3性格不明構造、P17・18・19・24・25より新しい。検出長は約19.1mで、調査区外の東に続くが、西側は搅乱を受けており不明である。方向はE-7°-Nである。上幅30~120cm、下幅23~67cm、深さ20~39cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は凹凸があり、東から西に向かって緩やかに傾斜する。堆積土は3層に分かれている。堆積土から土師器の壺・甕、須恵器の壺・甕等が34点出土しているが、いずれも小破片のため、図化するまでにはいたらなかった。

SD7溝跡(第14・15図)

A区中央に位置する。P27より新しい。検出長は約9.8mで、調査区外の東に続くと考えられる。方向はE-3°-Nである。上幅30~96cm、下幅8~47cm、深さ15~27cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。



第19図 近世墓群 (SK3 ~ 23) 平面図

底面は凹凸があり、傾斜は見られない。堆積土は2層に分かれる。堆積土から土師器の壺、須恵器の壺・甕等が15点出土しているが、いずれも小破片のため、図化するまでにはいたらなかった。

SD8溝跡(第16図)

A区南東に位置する。SD9溝跡より新しい。検出長は約4.4mで、北側で溝の立ち上がりを検出しており、調査区外の南に続くと考えられる。方向はN - 10° - Eである。上幅57cm ~ 195cm以上、下幅33 ~ 95cm、深さ32 ~ 77cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北から南に向かって傾斜する。堆積土は6層に分かれる。堆積土から土師器、須恵器の甕、平瓦等が5点出土している。このうち平瓦1点を図化した(第17図)。G-1は凹面、凸面ともにナデ調整される。

SD9溝跡(第16図)

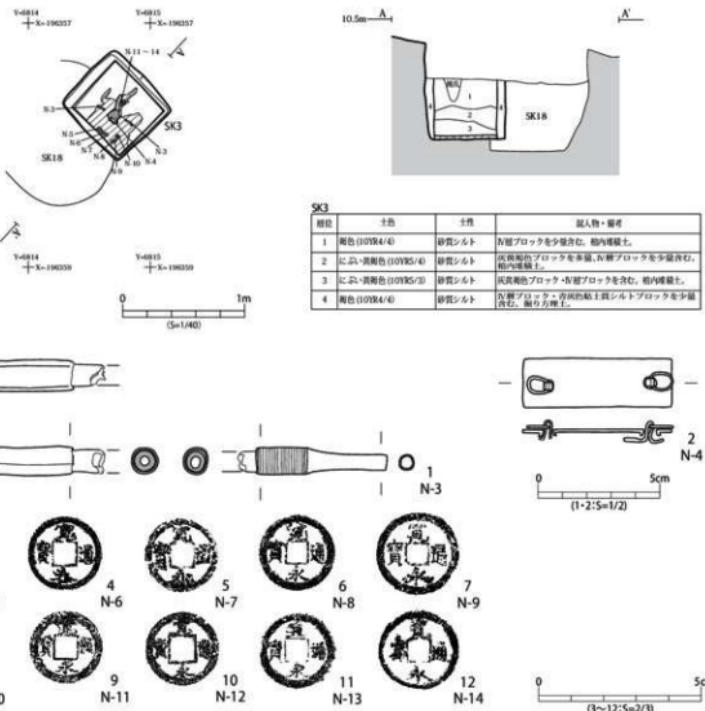
A区南東に位置する。SD8溝跡より古い。検出長は約2.8mで、調査区外の東に続くと考えられる。方向はE - 10° - Nである。上幅35 ~ 82cm、下幅31 ~ 60cm、深さ25cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、傾斜は見られない。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

4. 土坑・近世墓

検出した土坑23基中、21基が近世墓である。近世墓は18基を調査し、残る3基は大半が調査区外に延びるため、平面形状の確認にとどめた。また、墓壙を検出したのち、棺材を確認するため、ある程度掘り下げを行なってから堆積状況を調査した墓壙がいくつかある。調査した近世墓のうち6基から人骨が出土しているが、いずれも遺存状態が良好でなく、とりあげが不可能で被葬者の性別や年齢を確認することはできなかった。

SK1土坑(第18図)

A区中央に位置する。P20より古い。北側が天地返しにより失われており、平面形は不明である。規模は65



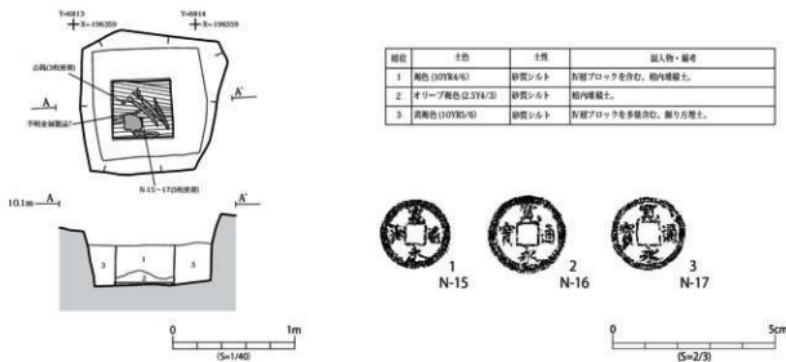
番号	目録番号	種別	沿線	出土場所	遺物名	出土位置等	全長	幅	厚	孔径	特徴	写真 No.
1	N-3	金属製品 墓葬用具	AHK	SK3	武則直上	(0.51) 7.2	1.8	0.9	-	留字印0.8cm、出土状況から縦貫(縦)一輪(横)の全長約32cm	11-3	
		金属製品 墓葬用具				(0.61) 5.3	-	0.9	0.6	留字印0.85cm、周辺に施条有り		
2	N-4	金属製品 硬貨	AHK	SK3	武則直上	6.1	2.0	10.2	(0.3cmの円孔2ヶ所	材質：銅	11-4	
3	N-5	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.3	0.5	2.6	新舊未定(前輪年1697年)		11-5	
4	N-6	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.3	0.7	1.4	新舊未定(前輪年1697年)		11-6	
5	N-7	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.3	0.6	2.2	新舊未定(前輪年1697年)		11-7	
6	N-8	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.5	0.6	2.6	新舊未定(前輪年1697年)		11-8	
7	N-9	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.3	0.6	2.3	新舊未定(前輪年1697年)		11-9	
8	N-10	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.3	0.6	2.4	新舊未定(前輪年1697年)		11-10	
9	N-11	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.2	0.6	1.9	古鏡未定(前輪年1636年)		11-11	
10	N-12	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.25	0.7	1.7	新舊未定(前輪年1697年)		11-12	
11	N-13	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.3	0.65	2.1	新舊未定(前輪年1697年)		11-13	
12	N-14	金属製品 古鏡	AHK	SK3	武則直上	2.4	0.7	2.3	古鏡未定(前輪年1636年)		11-14	

第20図 SK3 墓塚平面図・断面図・出土遺物

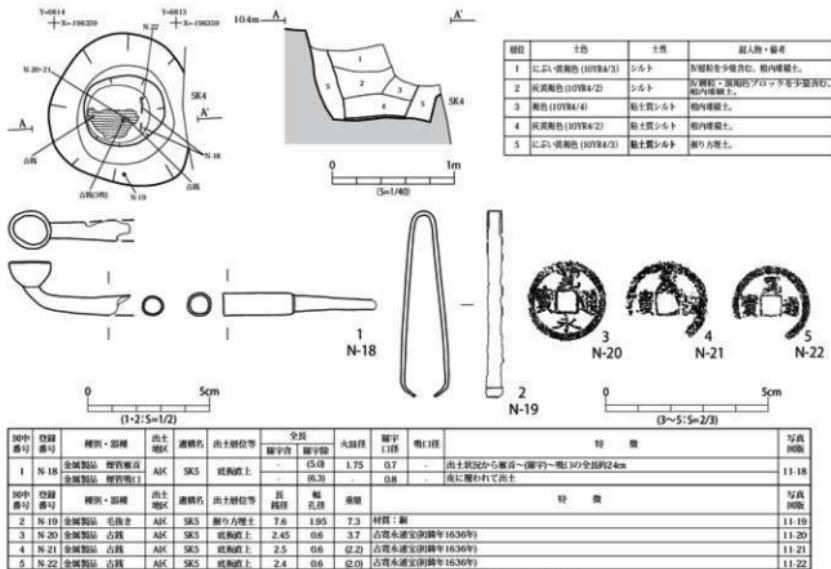
cm以上×31cm以上である。深さは10cmである。底面は平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれ。堆積土から土師器の表が4点出土しているが、いずれも小破片のため、図化するまでにはいたらなかった。

SK2 土坑(第18図)

A区中央南寄りに位置する。平面形は113cm×80cmの不整形である。深さは50cmである。底面は平坦で、壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は3層に分かれ。堆積土から土師器、須恵器の环が2点出土しているが、いずれも小破片のため、図化するまでにはいたらなかった。



第21図 SK4 墓塚平面図・断面図・出土遺物

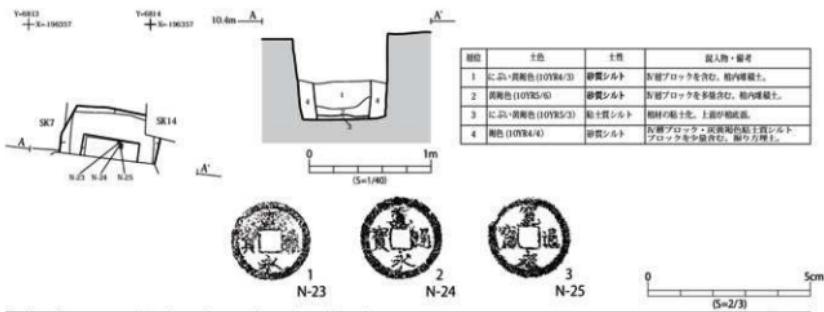


第22図 SK5 墓塚平面図・断面図・出土遺物

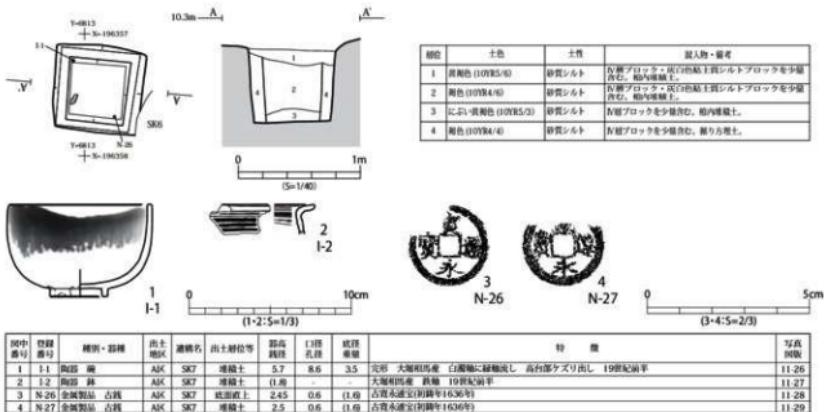
SK3 墓塚 (第19・20図)

A区南西に位置する。SK18 墓塚より新しい。掘り方の平面形は 68cm × 62cm の方形である。深さは 79cm である。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は 58cm × 52cm の方形木棺であり、底板が残存している。棺の残存高は 50cm である。棺内の堆積土は 4 層に分かれている。

底板直上から煙管 1 組、棺金具 1 点、古銭 14 枚 (古寛永通宝 2 枚、新寛永通宝 6 枚、新古不明の寛永通宝 2



第23図 SK6 墓壙平面図・断面図・出土遺物



第24図 SK7 墓壙平面図・断面図・出土遺物

枚、銭銘不明の銅鏡4枚)が出土している。このうち煙管1組、棺金具1点、古銭10枚を図化した(第20図)。

棺内堆積土からは磁器蓋?、鉄釘、鉄滓が出土している。古銭には羽冠が付着している。

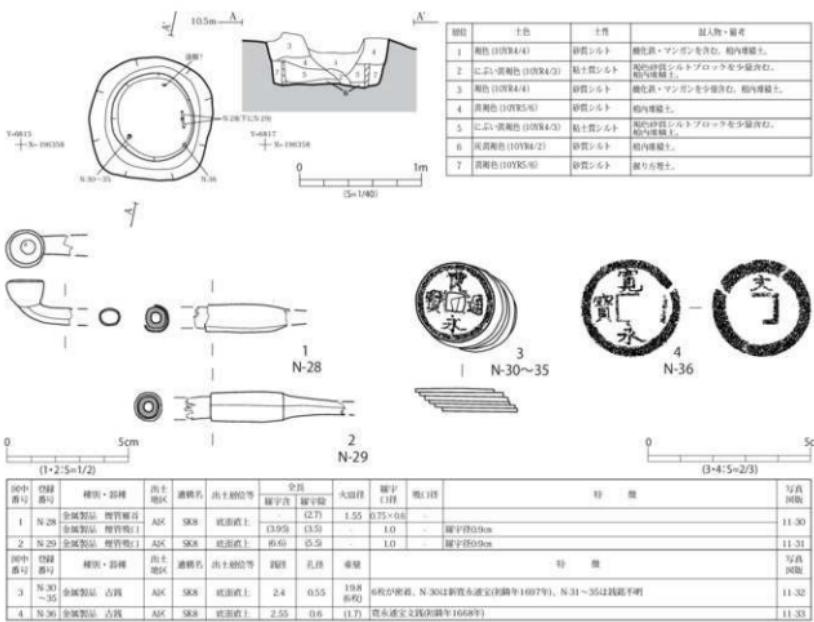
SK4 墓壙(第19・21図)

A区南西に位置する。SK5・6・18墓壙より新しい。掘り方の平面形は一辺119cmの不整形である。深さは45cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は50cm×46cmの方形木棺であり、底板が残存していた。棺の残存高は32cmである。棺内の堆積土は2層に分かれている。

底板直上から不明鉄製品1点、古銭6枚(新寛永通宝2枚、新古不明の寛永通宝1枚、銭銘不明の銅鏡3枚)が出土している。このうち古銭3枚を図化した(第21図)。棺内堆積土からは鉄釘が出土している。

SK5 墓壙(第19・22図)

A区南西に位置する。SK4墓壙より古い。掘り方の平面形は130cm×122cmの楕円形である。深さは74cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は66cm×47cmの円形木棺であり、底板が残存していた。棺の残存高は60cmである。棺内の堆積土は4層に分かれている。



第25図 SK8墓墳平面図・断面図・出土遺物

底板直上から煙管1組、古銭8枚(古寛永通宝3枚、銭銘不明の銅銭5枚)が出土している。掘り方からは毛抜き1点が出土している。このうち煙管1組、毛抜き1点、古銭3枚を図化した(第22図)。

SK6墓墳(第19・23図)

A区南西に位置する。SK4・14墓墳より古く、SK7・17墓墳より新しい。南側がSK4墓墳の掘り込みによって失われているが、掘り方の平面形は81cm×41cm以上の方形と考えられる。深さは68cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は46cm×17cm以上の方形木棺と見られる。棺の残存高は70cmである。棺内の堆積土は3層に分かれれる。

底板直上から古銭3枚(古寛永通宝1枚、新寛永通宝2枚)が出土している。このうち古銭3枚を図化した(第23図)。棺内堆積土からはクロロ調整土師器の壺、鉄釘が出土している。

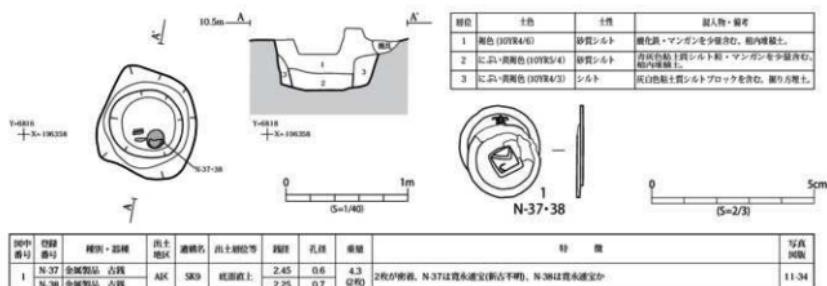
SK7墓墳(第19・24図)

A区南西に位置する。SK6墓墳より古い。掘り方の平面形は74cm×67cmの方形である。深さは62cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。棺は一辺50cmの方形木棺である。棺の残存高は54cmである。底板がわずかに残存していた。棺内の堆積土は3層に分かれれる。

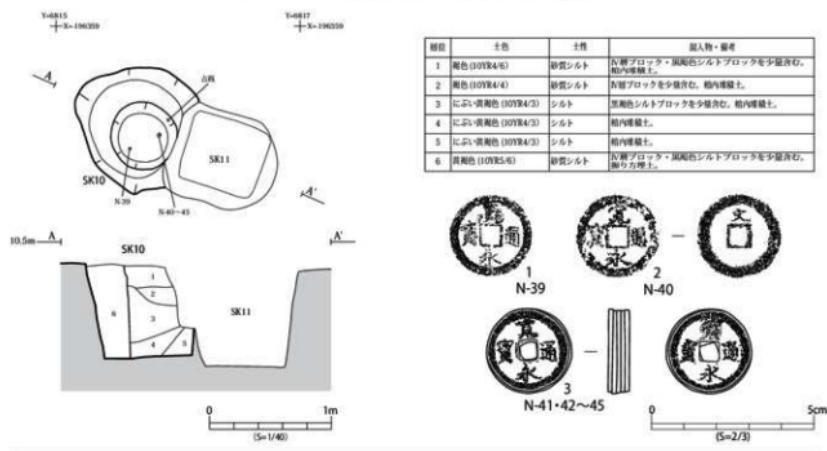
底板直上から古銭1枚(古寛永通宝)が出土した。棺内堆積土からは陶器碗・鉢、古銭1枚(古寛永通宝)、鉄釘が出土した。このうち陶器2点、古銭2点を図化した(第24図)。I-1は完形の碗で、白濁釉に緑釉を流し掛けている。堆積土の中程より口縁部が下になった状態で出土している。I-2は鉢の口縁部破片で、釉は鉄釉である。2点とも大堀相馬産で、年代は19世紀前葉頃と考えられる。

SK8墓墳(第19・25図)

A区南西に位置する。掘り方の平面形は106cm×100cmの楕円形でほぼ円形に近い。深さは43cmである。底



第26図 SK9 墓塚平面図・断面図・出土遺物



第27図 SK10 墓塚平面図・断面図・出土遺物

面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は72cm×67cmの円形木棺である。棺の残存高は20cmである。棺内の堆積土は7層に分かれれる。

底面直上から煙管1組と煙管吸口1点、古銭7枚（寛永通宝文銭1枚、新寛永通宝1枚、銭銘不明の銅銭5枚）が出土している。このうち煙管1組と吸口1点、古銭7枚を図化した（第25図）。古銭（N30～35）は6枚が密着した状態で出土した。

SK9墓塚（第19・26図）

A区南西に位置する。掘り方の平面形は99cm×79cmの不整楕円形である。深さは48cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は60cm×55cmの円形木棺である。棺の残存高は26cmである。棺内の堆積土は2層に分かれれる。

棺内堆積土から人骨（頭蓋骨、四肢骨）、古銭3枚以上（新古不明の寛永通宝1枚、銭銘不明（寛永通宝か）の

銅銭 1 枚、鉄銭 1 枚以上) が出土している。このうち古銭 2 枚を図化し(第 26 図)、鉄銭 (N-100) を写真で提示した(写真図版 11)。鉄銭は錯で覆われており、複数枚密着している。銭鉢や枚数は不明である。

SK10 墓壙(第 19・27 図)

A 区南西に位置する。SK11 墓壙より古い。掘り方の平面形は 100cm × 88cm 以上の不整楕円形である。深さは 78cm である。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は直径 54cm の円形木棺である。棺の残存高は 76cm である。棺内の堆積土は 5 層に分かれる。

底面直上から古銭 8 枚(寛永通宝文銭 1 枚、新寛永通宝 3 枚、銭鉢不明の銅銭 4 枚) が出土している。棺内堆積土から人骨、歯、土師質土器皿、鉄釘が出土している。このうち古銭 7 枚を図化した(第 27 図)。古銭 (N41 ~ 45) は 5 枚が密着している。小破片のため図化できなかった土師質皿の底部には回転糸切り痕が見られる。

SK11 墓壙(第 19・28 図)

A 区南西に位置する。SK10 墓壙より新しい。搅乱を掘削する際に掘り方の一部を掘り過ぎてしまったため、平面形は 114cm × 78cm の不正楕円形であるが、本来は 78cm 四方の方形であった可能性が高い。深さは 80cm である。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は一辺 50cm の方形木棺である。棺の残存高は 23cm である。棺内の堆積土は 5 層に分かれる。

底面直上から煙管 1 組、古銭 7 枚(新寛永通宝 3 点、銭鉢不明の銅銭 4 枚) が出土している。棺内堆積土からは煙管吸口、歯、鉄釘が出土している。このうち煙管 1 組、煙管吸口 1 点、古銭 3 枚を図化した(第 28 図)。

SK12 墓壙(第 19・29 図)

A 区南西に位置する。平面形は 68cm × 53cm の方形である。深さは 18cm である。棺の痕跡は確認されなかったが、鉄釘が出土していることから、直葬ではなく、木棺を使用していたものと考えられる。底面は平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。

底面直上から煙管 1 組、古銭 7 枚(新寛永通宝 1 枚、銭鉢不明の銅銭 1 枚、鉄銭 5 枚) が出土している。このうち煙管 1 組、古銭 1 枚を図化し(第 29 図)、鉄銭 2 点を写真で提示した(写真図版 11)。堆積土からは人骨、鉄釘が出土している。

SK13 墓壙(第 19・30 図)

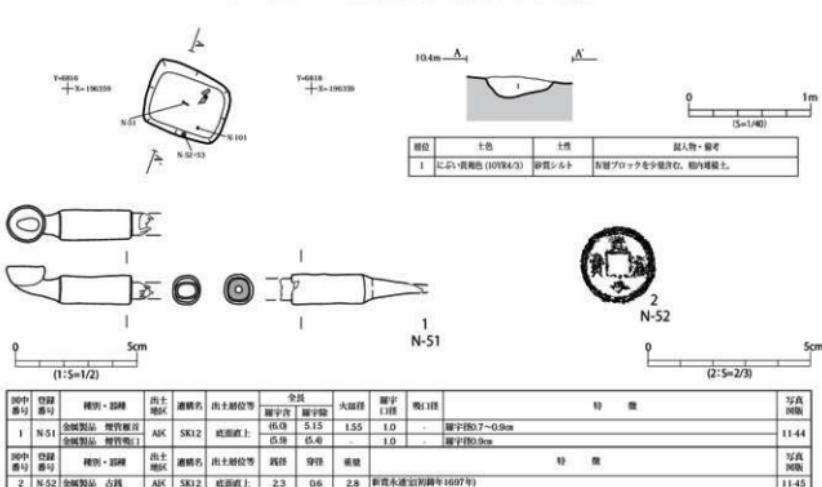
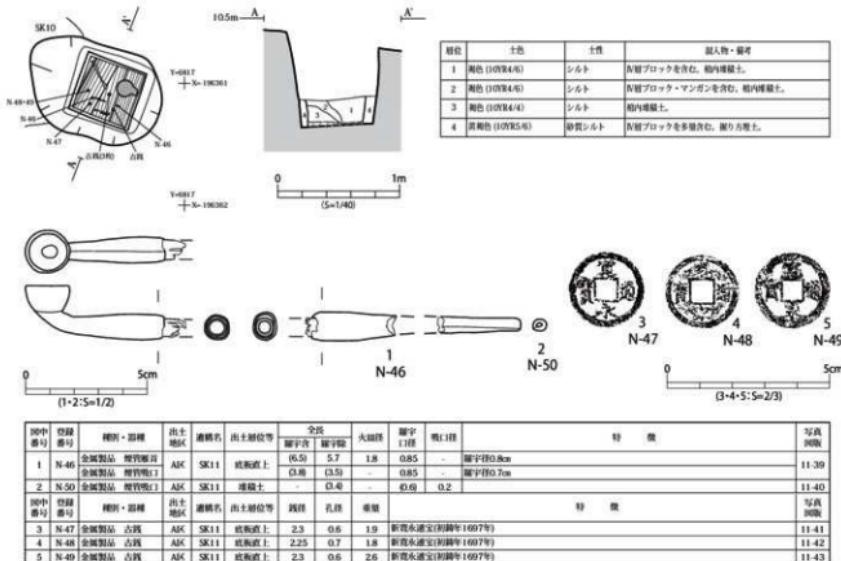
A 区南西に位置する。SK14 墓壙より古い。掘り方の平面形は、南側を SK14 墓壙の掘り込みで失なわれているが、114cm × 100cm の楕円形と考えられる。深さは 82cm である。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は直径 56cm の円形木棺であり、底板が残存していた。棺の残存高は 46cm である。棺内の堆積土は 4 層に分かれる。

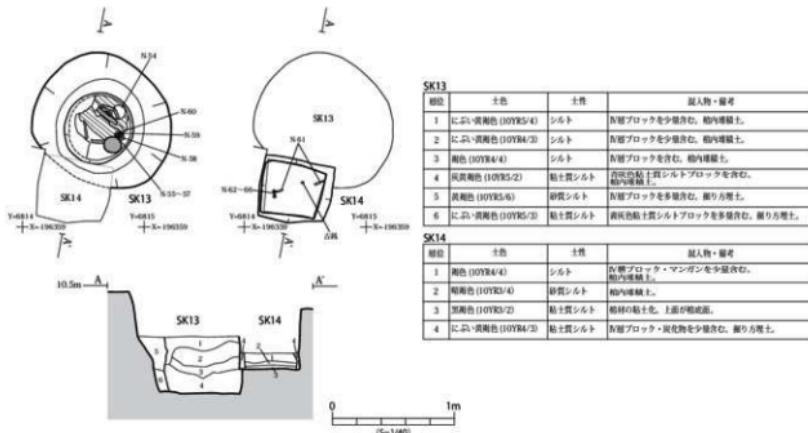
底板直上から和鏡 1 面、古銭 6 枚(古寛永通宝 2 枚、寛永通宝文銭 1 枚、新古不明の寛永通宝 3 枚) が出土している。和鏡 1 面、古銭 6 枚を図化した(第 31 図)。和鏡 (N-54) は柄鏡で、鏡面を下にして納められており、鏡の上に人骨が重なって出土している。背面の地文は細粒砂目地であり、菱形区画に櫛の家紋、生垣、梅に鶴の意匠が描かれ、「上鶴和泉守」銘がある。棺内堆積土からは人骨、歯、鉄釘が出土している。

SK14 墓壙(第 19・30 図)

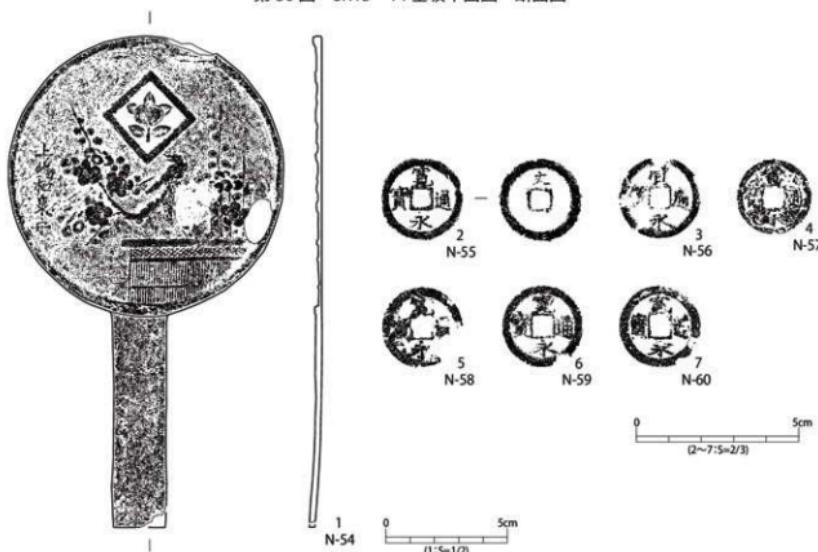
A 区南西に位置する。SK13 墓壙より新しい。掘り方の平面形は 58cm × 50cm の方形である。深さは 50cm である。底面は平坦で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。棺は一辺 45cm の方形木棺である。棺の残存高は 13cm である。棺内の堆積土は 3 層に分かれる。

底面直上から煙管 1 組、古銭 7 枚(古寛永通宝 4 枚、新寛永通宝 1 枚、銭鉢不明の銅銭 2 枚以上) が出土している。このうち煙管 1 組、古銭 5 枚を図化した(第 32 図)。

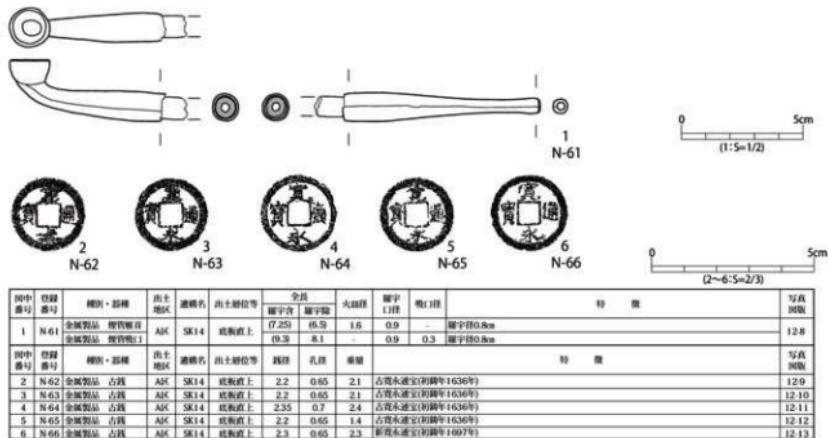




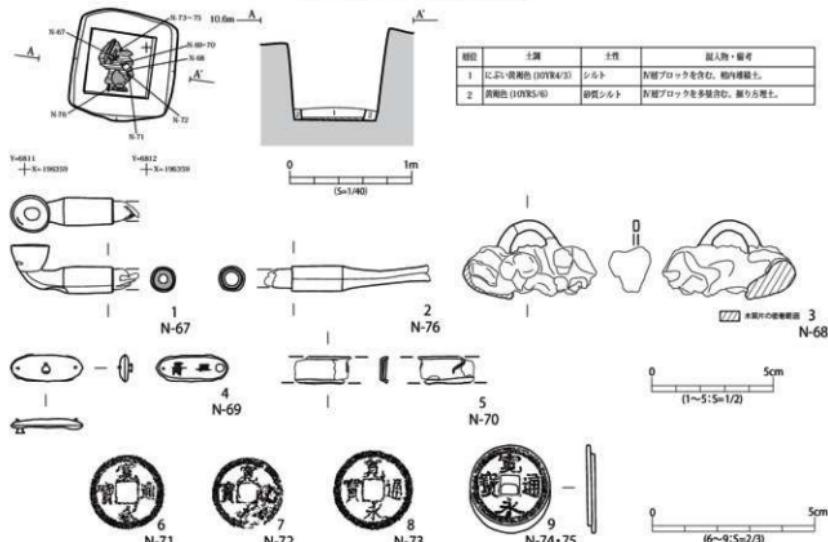
第30図 SK13・14墓墳平面図・断面図



第31図 SK13墓墳出土遺物



第32図 SK14墓壙出土遺物



第33図 SK15墓壙平面図・断面図・出土遺物

SK15 墓壙(第19・33図)

A区南西に位置する。SK21墓壙より新しい。掘り方の平面形は90cm×80cmの方形である。深さは75cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は一辺54cmの方形木棺であり、底板が残存していた。棺の残存高は9cmである。棺内の堆積土は単層である。

底面直上から煙管1組、棺金具1点、棺金具または飾り金具の可能性があるものが2点、古銭5枚(古寛永通宝1枚、新寛永通宝3枚、銭銘不明の銅銭1枚)が出土している。このうち煙管1組、金具3点、古銭5枚を図化した(第33図)。棺金具(N-68)は半円形のつまみ部分は銅製、他の部分は鉄で不明である。本質が付着して残存しており、棺に取り付けられていた可能性が高い。金具(N-69)は内側に布が残存し、その布を固定するように糸が縫いこまれている。また内側から外側に向けて2本の鎖が差し込まれており、外側へ貫通している。金具(N-70)にも糸が付着している。N-69とN-70は、ほぼ密接した範囲から出土していることと材質、形状の類似から、2つを組み合わせて用いていた棺金具または飾り金具の可能性がある。棺内堆積土から鉄釘が出土している。

SK16 墓壙(第19・34図)

A区南西に位置する。SK20墓壙より新しい。掘り方の平面形は100cm×90cmの方形である。深さは60cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺の平面形は66cm×58cmの方形木棺であり、底板がわずかに残存していた。棺の残存高は8cmである。棺内の堆積土は単層である。

底板直上から煙管吸口1点、古銭7枚(古寛永通宝1枚、新寛永通宝2枚、新古不明の寛永通宝1枚、銭銘不明の銅銭3枚)、ガラス製小玉がまとまって112個出土している。このうち煙管吸口1点、古銭7枚を図化し(第34図)、ガラス製小玉を写真で提示した(写真図版12)。古銭(N81~84)は4枚が密着しており、糸が付着していた。ガラス製小玉(X-1)112点のうち、107点は直径5mm、厚さ3mm、中央に直径1mmの円孔が開けられた透明なガラス製である。そのうち13点は白色や青色の混じりが多く、透明感に欠けるものがある。残る5点は直径5mm、厚さ3~4mm、中央に直径1.5mmの円孔が開けられた黒色のガラス製で、表面がやや発泡している。112点のガラス製小玉のうち5点の黒色小玉をのぞくと107点となり、108個での構成が一般的な数珠の仕様とほぼ合致することになる。このことからX-1は黒色小玉によって装飾された数珠の可能性がある。

SK17 墓壙(第19・35図)

A区南西に位置する。SK6・14墓壙より古く、SK13墓壙より新しい。掘り方の平面形は南側をSK6墓壙、東側をSK14墓壙に掘り込まれて失われているが、46cm以上×43cm以上の方形と考えられる。深さは34cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺の平面形は35cm以上×25cm以上の方形木棺と考えられる。棺内の堆積土は2層に分かれれる。

底面から遺物の出土ではなく、棺内堆積土から鉄釘が出土している。

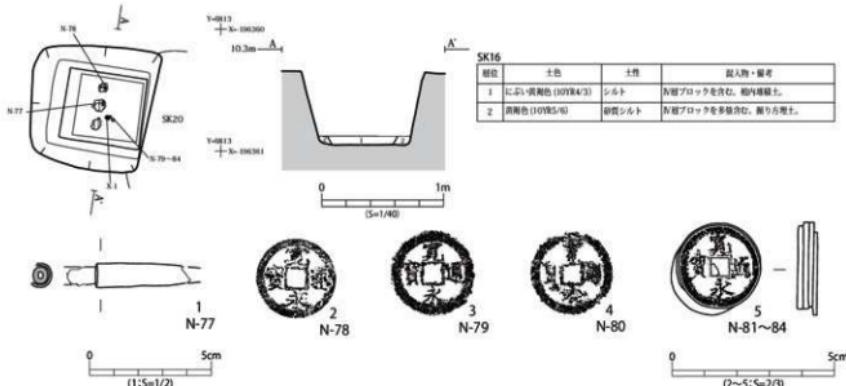
SK18 墓壙(第19・36図)

A区南西に位置する。SK3・4墓壙より古い。北西側をSK4墓壙に掘り込まれて失われているが、掘り方の平面形は118cm×91cm以上の橢円形と考えられる。深さは82cmである。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は直径64cmの円形木棺であり、底板が残存していた。棺の残存高は54cmである。棺内の堆積土は5層に分かれれる。

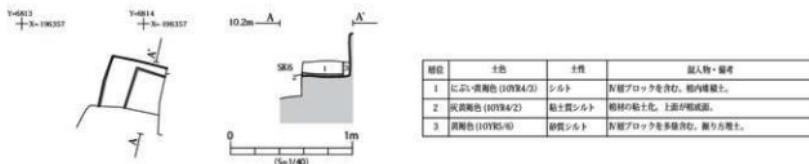
底板直上から古銭6枚(銭銘不明の銅銭)が出土している。古銭は6枚が密着した状態で、銭銘も不明であるため図化していない。

SK19 墓壙(第19・37図)

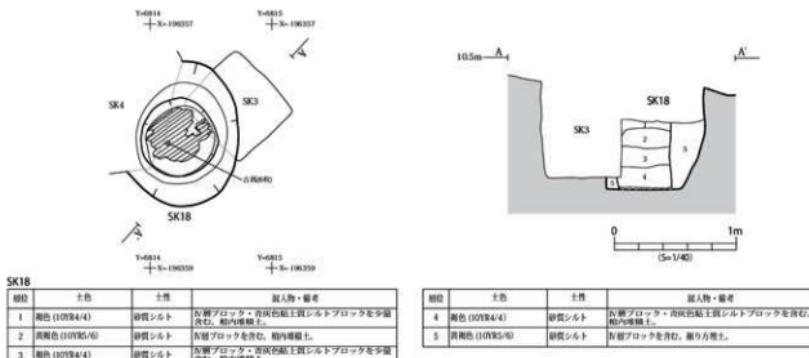
A区南西に位置する。掘り方の平面形は一辺119cmの隅丸方形と考えられる。深さは92cmである。底面は平



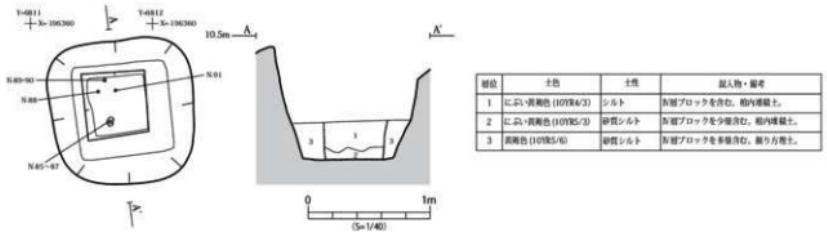
第34図 SK16 墓塚平面図・断面図・出土遺物



第35図 SK17 墓塚平面図・断面図

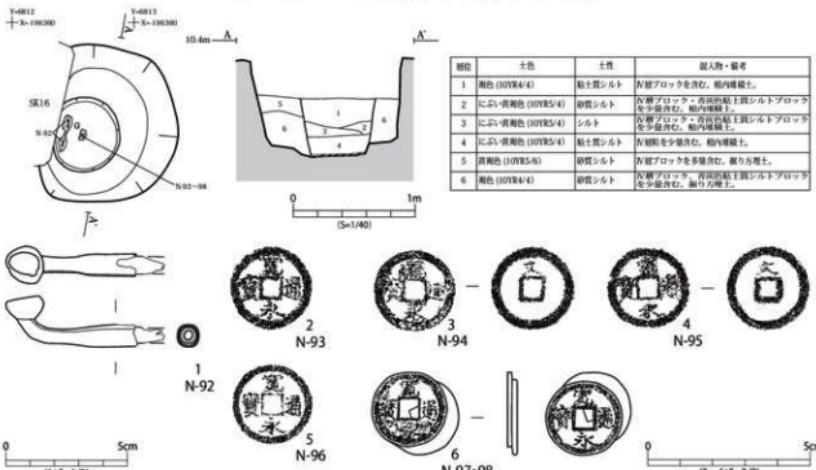


第36図 SK18 墓塚平面図・断面図



出中番号	登録番号	種別・品種	出土地区	連機名	出土部位等	直径	孔径	重積	特徴	写真番号
1	N-85	金銅製品 古鏡	AIIK	SK19	底板直上	2.5	0.55	4.3	霞永通宝文(和銅年1668年)	12.29
2	N-86	金銅製品 古鏡	AIIK	SK19	底板直上	2.35	0.6	3.1	新霞永通宝(和銅年1667年)	12.30
3	N-87	金銅製品 古鏡	AIIK	SK19	底板直上	2.3	0.6	2.5	霞永通宝(和銅年1667年)	12.31
4	N-88	金銅製品 古鏡	AIIK	SK19	底板直上	2.4	0.6	2.6	新霞永通宝(和銅年1667年)	12.32
5	N-89	金銅製品 古鏡	AIIK	SK19	底板直上	2.4	0.55	3.5	古霞永通宝(和銅年1667年)	12.33
6	N-90	金銅製品 古鏡	AIIK	SK19	底板直上	2.4	0.55	3.6	古霞永通宝(和銅年1636年)	12.34
7	N-91	金銅製品 古鏡	AIIK	SK19	底板直上	2.4	0.6	4.0	古霞永通宝(和銅年1636年)	12.35

第37図 SK19 墓壙平面図・断面図・出土遺物



出中番号	登録番号	種別・品種	出土地区	連機名	出土部位等	全長	火葬骨	腰子骨	飛口骨	特徴	写真番号
1	N-92	金銅製品 研磨鏡	AIIK	SK20	底板直上	5.0	5.4	1.55	0.8	腰子骨0.7cm、火葬がつされてゆかんでいる。飛口は生存状態悪く分化できなかった	12.36
2	N-93	金銅製品 古鏡	AIIK	SK20	底板直上	2.5	0.5	2.8	3.8	古霞永通宝(和銅年1636年)	12.37
3	N-94	金銅製品 古鏡	AIIK	SK20	底板直上	2.5	0.5	3.8	3.8	新霞永通宝(和銅年1668年)	12.38
4	N-95	金銅製品 古鏡	AIIK	SK20	底板直上	2.5	0.55	3.3	3.8	霞永通宝(和銅年1668年)	12.39
5	N-96	金銅製品 古鏡	AIIK	SK20	底板直上	2.4	0.5	3.4	3.8	古霞永通宝(和銅年1636年)	12.40
6	N-97	金銅製品 古鏡	AIIK	SK20	底板直上	2.3	0.6	6.5	6.5	新霞永通宝(和銅年1667年)、N-98と複数	12.41
7	N-98	金銅製品 古鏡	AIIK	SK20	底板直上	2.3	0.6	6.0	6.0	新霞永通宝(和銅年1667年)、N-97と複数	12.41

第38図 SK20 墓壙平面図・断面図・出土遺物

坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺の平面形は 55cm × 50cm の方形木棺と考えられる。棺の残存高は 30cm である。棺内の堆積土は 2 層に分かれる。

遺物は底面直上から古銭 7 枚（古寛永通宝 3 枚、寛永通宝文銭 1 枚、新寛永通宝 2 枚、新古不明の寛永通宝 1 枚）が出土している。古銭 7 枚を図化した（第 37 図）。棺内堆積土からは鉄釘が出土している。

SK20 墓壙（第 38 図）

A 区南西に位置する。SK16 墓壙より古い。西側を SK16 墓壙の掘り込みによって失われているが、掘り方の平面形は 131cm × 90cm 以上の楕円形と考えられる。深さは 80cm である。底面は平坦であるが、棺付近で段を持つ。壁は掘り方底面からほぼ垂直に立ち上がる。棺は 62cm × 52cm の円形木棺であり、底板がわずかに残存していた。残存高は 48cm である。棺内の堆積土は 5 層に分かれる。

底板直上から煙管 1 組、古銭 6 枚（古寛永通宝 2 枚、寛永通宝文銭 2 枚、新寛永通宝 2 枚）が出土している。このうち煙管雁首 1 点、古銭 6 枚を図化した（第 38 図）。吸口は遺存状態が良好ではなく、図化できなかった。棺内堆積土からは歯が出土している。

SK21～23 墓壙（第 19 図）

A 区南西に位置する。3 基とも大部分が調査区外に延びるため、平面形状の確認にとどめた。位置関係や堆積土の類似から、近世墓と考えられる。SK21 墓壙は SK15 墓壙より古い。SK21 墓壙は 128cm × 86cm、SK22 墓壙は 39cm 以上 × 38cm 以上、SK23 墓壙は 36cm 以上 × 25cm 以上の方形を基調とするものと考えられる。

5. 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構（第 39 図）

A 区中央に位置する。SD6 溝跡より古い。平面形は、天地返しと SD6 溝跡の掘り込みにより北側が失われているため不明であるが、残存部分は不整形である。規模は 125cm 以上 × 39cm 以上である。深さは 6 ～ 10cm である。底面は平坦であり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SX2 性格不明遺構（第 39 図）

A 区中央に位置する。南北を天地返しによって失われており、平面形は不明であるが、残存部分は不整形である。規模は 54cm 以上 × 52cm である。深さは 8 ～ 15cm である。底面は平坦であり、壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は 4 層に分かれる。堆積土から地文が縄文の土器が 2 点出土しているが、いずれも小破片のため、図化できなかった。

SX3 性格不明遺構（第 39 図）

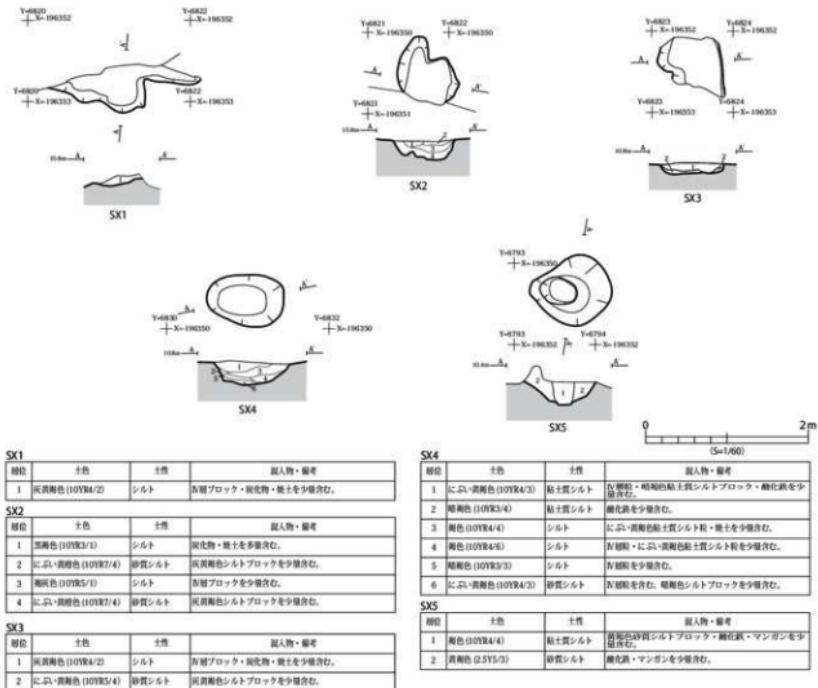
A 区中央に位置する。SD6 溝跡より古い。北側が SD6 溝跡、南側が天地返しによって失われており、平面形は不明であるが、残存部分は不整形である。規模は 54cm 以上 × 52cm である。深さは 5 ～ 10cm である。底面には凹凸がみられ、壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は 2 層に分かれる。堆積土から土師器の壺・甕が 4 点出土しているが、いずれも小破片のため、図化できなかった。

SX4 性格不明遺構（第 39 図）

A 区北東に位置する。平面形は 64cm × 42cm の楕円形である。深さは 10 ～ 18cm である。底面には凹凸がみられ、壁は底面から緩やかに立ち上がる。また、壁の一部は抉れて、オーバーハングしている。堆積土は 6 層に分かれる。遺物は出土していない。

SX5 性格不明遺構（第 39 図）

C 区中央に位置する。平面形は 67cm × 58cm の不整楕円形である。深さは 27cm である。底面は凹凸がみられ、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。



第39図 SX1～5性格不明遺構平面図・断面図

6. 自然流路跡

SRI 自然流路跡 (第3・4図)

B区中央に位置する。検出長4.3mで、調査区外の西と南東に続くとみられるが、A区とC区では検出されなかった。南に向かって底面が上がっていることから、この付近で収束している可能性が考えられる。上幅1.4～3.7m、下幅1.1m、深さ15～45cmである。堆積層は4層に分かれている。いずれも黄褐色シルトを主とした自然堆積土である。遺物は出土していない。

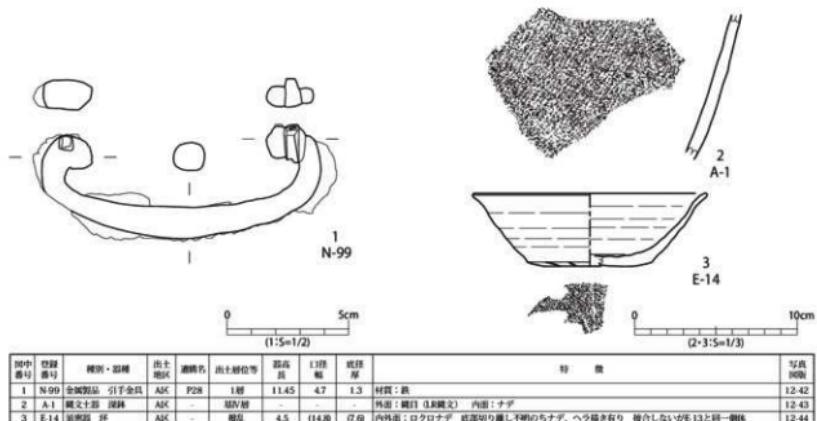
7. ピット

A区堀基礎部東側とA区全体で42のピットを検出している(第3図)。平面形は円形、楕円形が多い。堆積土は主に暗褐色と明黄褐色の2層に分けられ、柱痕跡の認められるものもみられる。A区中央東側のP37～41は柱間寸法が東西、南北ともに約1.7m前後に一定して確認されたが、柱穴数が合わず、建物跡として組み合いを認めるにはいたらなかった。遺物はP7・12・13・15・19・21・28・38～41より土師器の壺・甕、須恵器の壺、鉄製品等が出土している。このうち図化したP28出土のN-99は引手金具と考えられる(第40図)。

8. その他の出土遺物 (第40図)

ここでは、基本層や観測などの、遺構外から出土した遺物について記述する。

A-1は地文にLR縄文が施された深鉢の体部である。調査区南東部の基本層IV層から出土した。E-14は底部にヘラ描きがある須恵器の壺で、SI2 竪穴住居跡直上の天地返し土内から出土している。接合しないが、SI2 竪



第 40 図 ピット、その他の出土遺物

穴住居跡の E-13 と同一個体と考えられる。

これらのほかに、表土や攪乱から地文が繩文の土器片、古墳時代前期から中期の土師器壺・甕、須恵器の环や甕の破片を砾石に転用したものが出土している。いずれも小破片のため、図化するまでにはいたらなかった。

第 6 章 遺構と遺物の検討

南小泉遺跡第 61 次調査では古墳時代後期から平安時代、近世の遺構が発見された。また、遺構には伴っていないが、繩文時代もしくは弥生時代、古墳時代前期および中期の遺物も出土している。以下、時代ごとに総括する。

1. 弥生時代以前

主に基本層や天地返し、攪乱などから地文が繩文の土器、刺片等が 18 点出土している。また、SX2 性格不明遺構からは、地文が繩文の土器片が 2 点出土しており、繩文時代もしくは弥生時代に帰属する遺構の可能性がある。

2. 古墳時代

古墳時代前期から中期の遺構は検出されなかったが、天地返し、攪乱などから、土師器壺や甕の破片がわずかに出土している。

古墳時代後期の遺構は、SI1 積穴住居跡である。SI1 積穴住居跡からは有段丸底で内面黒色処理された環や、頸部に段を持ち、外側ハケメ調整された甕が出土している。これらは東北地方南部の土器編年(氏家 1957)で栗圓式に相当する。古い段階の SI1A 積穴住居跡(以下「A 期」とする。)の床面出土遺物は土錘のみで、時期決定資料にはならない。環(C-1・2)は床面や煙道部底面直上から出土しているもので、新しい段階の SI1B 積穴住居跡(以下「B 期」とする。)の掘り方埋土に覆われておらず、A 期の時期を示すものと考えられる。C-1 は底部が平底に近いもの、C-2 は丸底で口縁部が内弯気味に立ち上がるものである。C-1 のような平底に近い環は、栗圓式では新しい様相と考えられている(村田 2007)が、7 世紀後半頃とされる蔵王町塙沢北遺跡第 1 号住居跡(宮城県教委 1980)や仙台市長町駅東遺跡第 3 次調査 SI93 積穴住居跡(仙台市教委 2009)の出土資料などに類例があり、A 期の上限は 7 世紀後半頃と考えられる。B 期の床面出土遺物は甕(C-3・4)がある。C-3 は外側ハケメ調整で頸部に段を持ち、体部が球形で最大径が中程より下位にある下彫れのプロポーションになるものである。胴部が下彫れの甕は、長町駅東遺跡第 4 次調査 SI231・234 積穴住居跡出土資料(仙台市教委 2007)など 7 世紀代に類例が見られ、B 期の下限は 7 世紀末頃と考えられる。SI1 積穴住居跡では建て替えが確認されたが、出土遺

物からは両者に大きな時期差は認めにくく、7世紀後半から末頃と考えておきたい。

3. 平安時代

平安時代の遺構は、SI2 穫穴住居跡である。ロクロ調整土師器が出土しており、平安時代の型式である表杉ノ入式（氏家 1957）に相当する。SI2 穫穴住居跡の床面から出土している土師器はすべてロクロ調整のもので、住居に伴う遺物には非ロクロ調整土師器は認められない。この段階の土器を検討する上で指標となるのは、土師器の环や須恵器の环の口径に対する底径の比率（以下「底径口径比」とする。）、および底部の切り離し技法と再調整の有無であり、時期が新しくなるにつれ、底径口径比の減少、糸切りの増加、再調整の簡略化の傾向が指摘されている（白鳥 1980・宮城県教委 1981）。SI2 穫穴住居跡で底径口径比を計測できたものはすべて須恵器の环であり、そのうち床面から出土している 3 点の底径口径比は 0.49 ~ 0.53 で平均値は 0.52 である（床面出土以外の 7 点：0.51 ~ 0.56、10 点の平均値は約 0.53）。床面出土の 3 点の底部の切り離しはヘラ切りが 1 点、再調整により切り離し技法が確認できないものが 2 点である（床面出土以外ではヘラ切りと再調整により確認できないものが多い。糸切りは 1 点のみ）。

過去の南小泉遺跡の調査でも近い時期と考えられる遺構が多く検出されている。第 20 次調査（仙台市教委 1991）の SI-1 穫穴住居跡は 8 世紀末～9 世紀前葉を中心とする時期と考えられており、須恵器环の底径口径比は 0.51 ~ 0.63（平均値 0.56）、底部の切り離しは再調整のヘラ切りやヘラケズリである。非ロクロ調整土師器も伴っている。類似する例として栗原市伊治城跡 SI173 穫穴住居跡（築館町教委 1991）、大崎市野崎遺跡 SI15 穫穴住居跡（大崎市教委 2008）出土資料がある。伊治城跡 SI173 穫穴住居跡の須恵器环の底径口径比は 0.46 ~ 0.64（平均値 0.56）、野崎遺跡 SI15 穫穴住居跡の須恵器环の底径口径比は 0.46 ~ 0.57（平均値 0.52）で、両者とも底部の切り離しはヘラ切りである。また、非ロクロ調整土師器を伴っており、8 世紀末～9 世紀初頭頃と考えられている。

南小泉遺跡第 14 次調査（仙台市教委 1987）の SI-03 穫穴住居跡は 9 世紀前葉頃と考えられており、須恵器环の底径口径比は 0.52 ~ 0.60（平均値 0.54）、底部の切り離しはヘラ切りで、再調整されるものはない。非ロクロ調整土師器は伴っていない。類似する例として、多賀城跡 SE2101B 井戸跡（宮多研 1991）出土資料がある。須恵器环の底径口径比は 0.43 ~ 0.63（平均値 0.54）、底部の切り離しはヘラ切りで再調整されるものは少ない。非ロクロ調整土師器は伴っておらず、9 世紀第 2 四半期頃と考えられている。

南小泉遺跡第 6 次調査（仙台市教委 1983）の SI3 穫穴住居跡は 9 世紀前葉から中葉を中心とする時期と考えられており、須恵器环の底径口径比は 0.45 ~ 0.63（平均値 0.49）、底部の切り離しは回転糸切りが多く、ヘラ切りと再調整により確認できないものが含まれる。非ロクロ調整土師器は伴っていない。類似する例として、多賀城跡 SK2167 土坑（宮多研 1993）出土資料がある。須恵器环の底径口径比は 0.43 ~ 0.55（平均値 0.50）、底部の切り離しは回転糸切り主体で、ヘラ切りも含まれる。非ロクロ調整土師器は伴っておらず、9 世紀中葉頃と考えられている。

これらと本調査の SI2 穫穴住居跡の資料と比較すると、南小泉遺跡第 20 次調査 SI-1 穫穴住居跡・伊治城跡 SI173 穫穴住居跡・野崎遺跡 SI15 穫穴住居跡の資料は底径口径比がほぼ同じか、やや大きく、非ロクロ調整土師器を伴う点で、本調査の SI2 穫穴住居跡より古い様相を示している。南小泉遺跡第 6 次調査 SI3 穫穴住居跡・多賀城跡 SK2167 土坑の資料は底径口径比が小さく、切り離しが糸切り主体であり、本調査の SI2 穫穴住居跡より新しい様相を示している。もっとも近い特徴を持つのは、南小泉遺跡第 14 次調査 SI-03 穫穴住居跡・多賀城跡 SE2101B 井戸跡の資料と考えられる。本遺跡の SI2 穫穴住居跡の資料は、切り離し後に再調整されるものが多く、これらよりやや古い時期の可能性もあるが、9 世紀前葉頃と考えておきたい。

遺構名	棺形態	寛永通宝			銭銘 不明 銅銭	鉄銭	出土 銭計	煙管		その他
		古寛永	文銭	新寛永				雁首	吸口	
SK3	方形	2	0	6	2	4	0	14	1	1 棺金具1、磁器蓋?1、鉄釘、鈎設
SK4	方形	0	0	2	1	3	0	6	0	0 不明鉄製品1、鉄釘
SK5	円形	3	0	0	0	5	0	8	1	1
SK6	方形	1	0	2	0	0	0	3	0	0 鉄釘
SK7	方形	2	0	0	0	0	0	2	0	0 大堀相馬彥綱1・鉢1、鉄釘
SK8	円形	0	1	1	0	5	0	7	1	2 漆腹?
SK9	円形	0	0	0	1	1	1	3	0	0 鉄釘は1枚以上か
SK10	円形	0	1	3	0	4	0	8	0	0 土師質皿4、鉄釘
SK11	方形	0	0	3	0	4	0	7	1	2 鉄釘
SK12	不明	0	0	1	0	1	5	7	1	1 鉄釘
SK13	円形	2	1	0	3	0	0	6	0	0 柄鏡、磁器碗?1、土師質皿4、鉄釘
SK14	方形	4	0	1	0	2	0	7	1	1 不明銭銘は細片で2枚以上の可能性あり
SK15	方形	1	0	3	0	1	0	5	1	1 棺金具1、棺金具?2、鉄釘
SK16	方形	1	0	2	1	3	0	7	0	1 ガラス小玉112、柄鏡
SK17	方形	0	0	0	0	0	0	0	0	0 鉄釘
SK18	円形	0	0	0	0	6	0	6	0	0
SK19	方形	3	1	2	1	0	0	7	0	0 鉄釘
SK20	円形	2	2	0	2	0	0	6	1	1
合計		21	6	26	11	39	6	109	8	11

第1表 近世墓出土遺物数量表

SB1 挖立柱建物跡の時期は不明であるが、柱抜取穴や掘り方埋土から、SI2 穫穴住居跡出土資料と類似したクロ調整土師器の壺や須恵器の壺が出土しており(写真図版10-33~35)、それより新しい時期の遺物は含んでいない。また、SI2 穫穴住居跡と建物方向も類似することから、平安時代に位置付けられる可能性がある。

これらのほかに、SD2・6・7溝跡はSI2 穫穴住居跡やSB1 挖立柱建物跡の方向にあわせるように掘削されており、この時期に位置付けられる可能性が考えられるが、出土遺物から裏付けることはできなかった。

4. 近世

近世の遺構は、SK3~23墓壙であり、21基のうち18基を調査した。埋葬施設の形態でみると方形木棺が10基、円形木棺(早桶)が7基、棺形態不明が1基である。確認された墓壙群の範囲は東西約6.5m、南北約5mで、調査区の西へさらに広がっていくものと考えられるが、延長上に位置するC区では検出されていない。棺内から出土した人骨はすべて腐蝕して土壌化しつつある状態であり、被葬者の性別や年齢を確認することができなかった。ここでは棺形態と出土遺物から墓壙群について若干の検討を行う。

1) 遺構の新旧関係

発見した近世墓のうち15基に重複関係が認められた。示すと以下のようにになる。



(古) 内は棺形態を表す

円形木棺は、切り合いのないSK8・9墓壙を除いて、すべて方形木棺に切られており、円形木棺が古く方形木棺が新しいという、棺形態による新旧関係が明瞭に認められた。

2) 遺物による時期の検討

古銭は SK17 墓壙を除く全ての近世墓から出土している（表 1）。出土状態から 6 枚一組を通例とするいわゆる六道銭と考えられるが、完掘した 18 基のうち 9 基では 7 枚以上埋納されていることが確認された。7 枚以上の多銭埋納は、六道銭の意味のほかに「撒き銭」といった風習や、多賀城市大日北遺跡の報告で指摘されている「多少の小遣い」（多賀城市教委 1998）といった意図で埋納されたものと推定される。

古銭は底板直上に複数枚が密着しているか、あるいは限られた範囲からまとまった状態で出土していることから、袋状のものに入れて棺に納められたものと推定される。また、SK3 と SK16 の古銭には精耕が付着しており、五穀豊穫を祈念して銭と共に精を入れた可能性がある。

古銭の銘銘が明らかなものは、出土総数 109 枚のうち 53 枚である。渡来銭ではなく、古寛永通宝（鋸造年代 1636（寛永 13）～1659（万治 2）年）21 枚、寛永通宝文銭（鋸造年代 1668（寛文 8）～1683（天和 3）年）6 枚、寛永通宝無背銭（鋸造年代 1697（元禄 10）～1781（元明 1）年）26 枚、他に錯のために銘銘が明らかではないが寛永通宝鉄一文銭（初鋤年 1739 年）とみられる鉄銭が 6 枚出土している。鋸造年代を上限として、銘銘が不明な SK18 墓壙の資料を除く各遺構から出土した古銭の内容をまとめると次のとおりとなる。

- ①古寛永のみ（1636～1659 年以降）—SK5 墓壙（○）、SK7 墓壙（□）
- ②文銭を含むもの（1668～1683 年以降）—SK13・SK20 墓壙（○）
- ③無背銭を含むもの（1697～1781 年以降）—SK8・10 墓壙（○）、SK3・4・6・11・14・15・16・19 墓壙（□）
- ④鉄一文銭を含むもの（1739 年以降）—SK9 墓壙（○）、SK12 墓壙（不明）

以上のように古銭の鋸造年代からは、棺形態の違いによる時期的な傾向性は認められない。

煙管は SK3・5・8・11・12・14～16・20 墓壙から出土しており、SK15 墓壙を除く 8 基で雁首と吸口が 1 組分確認されている。いずれも雁首の脛返しの湾曲が小さいか、湾曲がなく火皿と首部の間に補強帯のない煙管であり、18 世紀代の時期と考えられる（古泉 1992）。煙管が出土した墓壙の棺形態には円形、方形の両者が認められる。

和鏡は SK13 墓壙から 1 点出土している。背面に「上嶋和泉守」の銘があり、京の鏡師上嶋和泉守藤原久共を指すとみられる。鏡師銘の頭に付く「天下一」の文字が無く、姓・受領國名のみであることから、天和 2（1682）年の幕府による「天下一」銘の禁令以後に作製されたものとみられる。

陶器は時期決定が可能なものとして、SK7 墓壙の棺内堆積土から大堀相馬産の碗 1 点と鉢片 1 点が出土している。2 点とも 19 世紀前葉の所産とみられる。このことから SK7 墓壙と、重複関係で SK7 墓壙よりも新しい SK4・6・14 墓壙は、19 世紀前葉もしくはそれ以降の年代と考えられる。

以上の出土遺物の検討から、近世墓群は 18 世紀～19 世紀前半頃まで墓域として機能していたものと考えられる。棺形態による新旧関係は明瞭であったが、出土遺物で差異は認められず、埋葬方法の変遷に結びつけることはできなかった。棺内から出土した副葬品が、六道銭と煙管以外は身の回りの品々が散見される程度であることから、庶民階層の墓であったと考えられる。集落の共同墓地であったか、屋敷（一族）墓であったかは不明である。仙台藩領では煙管の副葬率が男性よりも女性のほうが高いという傾向が指摘されている（間根 2000）。しかし、和鏡が出土した SK13 墓壙は被葬者が女性である可能性が高いと考えられるが、煙管は出土していない。したがって、煙管出土の有無で性別を判断することは困難である。

卷之六

1. 南小泉遺跡第61次調査区は、南小泉遺跡の範囲内の南西に位置している。
 2. 今回の調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡9条、土坑2基、近世墓21基、性格不明遺構5基、自然流路跡1条、ピット42である。出土遺物は、非ロクロ調整土師器、ロクロ調整土師器、須恵器、陶器、石製品、銅製品、鉄製品である。
 3. 竪穴住居跡の時期は、出土遺物からSI1竪穴住居跡が古墳時代後期、SI2竪穴住居跡が平安時代に属するものと考えられる。SI1竪穴住居跡には建て替えが確認された。
 4. SB1掘立柱建物跡の時期は不明であるが、SI2竪穴住居跡出土資料と類似したロクロ調整土師器の表や須恵器の环が出土しており、SI2竪穴住居跡と建物方向も類似することから、平安時代に属する可能性がある。
 5. 近世墓は、出土遺物の傾向から庶民階層の墓と推定され、墓域として機能していた時期は18世紀～19世紀前半頃と考えられる。

<引用・参考文献>

- | | |
|--|---|
| 青木豊ほか
安芸錦子 | 1994 「柄鏡大鑑」刀水書房 |
| | 2005 「江戸遺跡出土のキセル・東大構内遺跡における時期別様相」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院外來診療棟地盤』東京大学理歴文化財調査室発掘調査報告書5 |
| 吾妻俊典 | 2004 「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 宮城県考古学会 |
| 阿部正光・佐藤敏幸
氏家和典
大崎市教育委員会 | 1997 「宮城県の近世幕と六道鉄」『近世の出土鉄 I-論考篇』兵庫埋蔵鉄調査会 |
| | 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会 |
| | 2008 「野崎遺跡・欠下遺跡・林谷遺跡-県道古川岩出山線雨生沢改良工事関連遺跡調査報告書』宮城県大崎市文化財調査報告書第4集 |
| 古泉弘
佐藤憲幸・村田晃一
白鳥良一
関相達人 | 1992 「日本の初期煙管に関する覚え書き」『平井尚志先生古希記念考古学論叢』郵政考古学会 |
| | 1996 「東北の煮炊具」『古代の土器研究-禮的土器様式の西・東4 煮炊具-』古代の土器研究会 |
| | 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』V 宮城県多賀城調査研究所 |
| | 1998 「相馬藩における近世窯業と城の展開」『東北大學埋蔵文化財調査年報』10 東北大學理歴文化財調査研究センター |
| 関相達人 | 2000 「江戸時代の喫煙に関する考古学的検討」『文化』第64号 |
| 瀬峰町教育委員会 | 1988 「下藤寺2遺跡-宮城県北部における奈良時代の住居 江戸時代の墓塚と墓標の調査-」瀬峰町文化財調査報告書第6集 |
| 仙台市教育委員会
仙台市教育委員会
仙台市教育委員会 | 1983 「南小泉遺跡-青葉子学園移転新幹工事地内調査報告書」仙台市文化財調査報告書第55集 |
| | 1987 「南小泉遺跡14次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第109集 |
| | 1989 「富沢遺跡・泉嶋遺跡-仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書I・II」仙台市文化財調査報告書第126集 |
| 仙台市教育委員会
仙台市教育委員会
仙台市教育委員会
仙台市教育委員会
仙台市教育委員会 | 1990 「南小泉遺跡第16~18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集 |
| | 1991 「南小泉遺跡第20次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第153集 |
| | 1994 「南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第192集 |
| | 1998 「南小泉遺跡第26次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第225集 |
| | 2007 「長町駅東遺跡第4次調査-仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第315集 |
| 仙台市教育委員会 | 2009 「長町駅東遺跡第三次調査-仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書III-」仙台市文化財調査報告書第340集 |
| 多賀城市教育委員会
谷川草雄ほか | 1998 「大日北遺跡-近世墓の調査報告書-」多賀城市文化財調査報告書第49集 |
| 築館町教育委員会 | 2009 「六道鉄の考古学」高志書院 |
| 東北古代土器研究会
井手久美男 | 1991 「伊治陶跡 平成2年度第1回発掘調査概報」栗原町文化財調査報告書第4集 |
| 古川市教育委員会 | 2005 「東北古代土器集成-古墳後期~奈良・集落編-『宮城』」東北古代土器研究会 |
| 宮城県教育委員会 | 1996 「日本出土鉄器寶1996年版」兵庫埋蔵鉄調査会 |
| 宮城県教育委員会 | 2005 「名生館古跡発掘」宮城県古川市文化財調査報告書第37集 |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1980 「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集 |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1981 「清水遺跡」『東北新幹線開通遺跡調査報告』V 宮城県文化財調査報告書第77集 |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1991 「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究年報1990 |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1993 「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究年報1992 |
| 村田晃一 | 2007 「V.宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文理学部 |

遺構名	基本剖 遺構堆積層名	縦文 赤生	非クロ 土師器	クロ 土師器	土師器	須恵器	瓦	陶器	磁器	石器 石製品	金屬 製品	土製品	その他	計	備 考 (その他の内訳)
床面		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
SIA	掘り方埋土	0	5	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	7	
	堆積土	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
SIA合計		0	9	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	12	
床面		0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
SIB	掘り方埋土	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	
	堆積土	0	54	0	0	1	0	0	0	1	1	2	9	68	焼成粘土塊9
SIB合計		0	76	0	0	1	0	0	0	1	1	2	9	90	
床面		0	0	7	0	4	0	0	0	0	1	0	0	12	
カマド		0	0	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	6	
SI2	ピット	0	1	33	15	6	0	0	0	0	0	1	56	焼成粘土塊1	
	掘り方埋土	1	1	58	49	15	0	0	0	1	0	1	0	126	
	堆積土	0	4	32	147	47	0	0	0	0	1	0	0	231	
SI2合計		1	6	134	211	74	0	0	0	1	2	1	1	431	
柱抜取穴埋土		0	1	7	14	10	0	0	0	0	0	0	3	33	焼成粘土塊3
掘り方埋土		0	3	17	97	24	0	0	0	0	0	1	6	148	焼成粘土塊6
SBI	合計	0	4	24	111	34	0	0	0	0	0	1	9	183	
SD2	堆積土	0	1	4	34	12	0	0	0	0	0	0	0	51	
SD3	堆積土	0	0	0	25	10	0	0	0	0	0	0	0	35	
SD5	堆積土	0	0	0	20	9	1	0	0	0	0	0	0	30	
SD6	堆積土	0	1	1	26	6	0	0	0	0	0	0	0	34	
SD7	堆積土	0	0	2	7	5	0	0	0	1	0	0	0	15	
SD8	堆積土	0	0	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	5	
SK1	堆積土	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
SK2	堆積土	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	
SK2	堆積土	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
SK3	堆積土	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
P7	堆積土	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
P12	堆積土	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
P13	堆積土	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
P15	堆積土	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
P19	堆積土	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
P21	掘り方埋土	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	5	
P26	堆積土	0	0	0	0	6	0	0	0	0	1	0	0	1	
P38	掘り方埋土	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	3	
P39	掘り方埋土	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	
P40	掘り方埋土	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	5	
P41	柱抜取穴埋土	0	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	6	
- 基IV層		5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	
- 表土・複疊		5	14	28	285	117	0	10	5	4	1	0	1	470	灰質I
合計		13	114	198	742	281	2	10	5	7	5	6	20	1403	

* 表中の「土師器」は小破片で非クロと調整かクロと調整の判断ができなかつるものである

第2表 遺物出土数量表

第3表 SI1・2 窓穴住居跡 観察表

遺構番号	位	置	平	面	方	向	東西(m)	×南北(m)	深さ(cm)	力	マ	ド	床	面	周	溝	柱	穴	埋り方	時	期
S I 1 A	A区北西	方	形	N-10°-W	3.75 × 3.30 × 25	あ	り	平	坦	な	し	あり	古	墳	後						
S I 1 B	A区北西	方	形	N-10°-W	4.28 × 3.60 × 40	あ	り	平	坦	な	し	あり	古	墳	後						
S I 2	A区北西	方	形	N-9°-W	4.30 × 4.19 × 15	あ	り	平	坦	な	し	7	基	あり	平	安					

第4表 SB1 堀立柱建物跡 観察表

遺構番号	位	置	向	S	構	造	橋	行(m)	×梁行(m)	深さ(cm)	方	向	柱	間	柱	穴	平	面	形	時	期
S B 1	A区北西	南	北	横	柱	柱	柱	5.17	× 4.10	90	N-11°-W	3 × 2	12	方	形	格	円	形	平安	以	同

第5表 SD1～9溝跡 観察表

遺構番号	位	置	走	行	方	全長(m)	×	上端幅(m)	深さ(cm)	平	面	形	断	面	形	時	期			
S D 1	A区基盤部東側	N-3°-W	(4.0)	×	0.67	×	14			直	線		逆	台	形		不	明		
S D 2	A区基盤部中央	N-1°-W	(4.4)	×	1.91	×	48			直	線		逆	台	形		平	安		
S D 3	A区基盤部東側	N-11°-E	(10.0)	×	0.87	×	61			直	線		U	字	形		平	安		
S D 4	A区北西	E-7°-N	(2.80)	×	1.00	×	79			直	線		逆	台	形		平	安		
S D 5	A区北西	N-2°-E	(7.40)	×	1.33	×	39			直	線		圓	形			平	安		
S D 6	A区中央	E-7°-N	(19.1)	×	1.20	×	67			直	線		逆	台	形		平	安		
S D 7	A区中央	E-3°-N	(9.80)	×	0.96	×	27			直	線		逆	台	形		平	安		
S D 8	A区南東	N-10°-E	(4.40)	×	1.95	×	77			直	線		く	広	がる	U	字	形	平	安
S D 9	A区南東	E-10°-N	(2.8)	×	0.82	×	25			直	線		逆	台	形		平	安		

第6表 SK1・2土坑、SK3～23墓壙 観察表

遺構番号	位	置	走	行	方	長	(m)	×	上端幅	(m)	深	さ(cm)	平	面	形	断	面	形	時	期			
SK 1	A区中央	横円形	面	W-21°-N	6.50m	×	0.01	×	10	m	平	明	不	明		K 13	A区南西	横円形	逆	台	形		
SK 2	A区中央	横円形	逆	台	形	W-10°-N	11.50	×	0.80	m	50	cm	平	明	以	K 14	A区南西	方	形	直	線	形	
SK 3	A区南西	小倒円形	面	-	68	m	62	×	79	m	近	世	K 15	A区南西	方	形	直	線	形				
SK 4	A区南西	小倒円形	面	-	110	m	119	×	45	m	平	近	K 16	A区南西	方	形	逆	台	形				
SK 5	A区南西	横円形	逆	台	形	-	130	m	122	m	74	cm	平	近	世	K 17	A区南西	方	形	直	線	形	
SK 6	A区南西	方	形	-	81	m	84	×	68	m	平	近	K 18	A区南西	面	形	逆	台	形				
SK 7	A区南西	方	形	-	74	m	67	×	62	m	平	近	K 19	A区南西	方	形	逆	台	形				
SK 8	A区南西	方	形	-	106	m	100	×	43	m	平	近	K 20	A区南西	方	形	直	線	形				
SK 9	A区南西	円	形	-	89	m	79	×	48	m	平	近	K 21	A区南西	方	形	-	直	線	形			
SK 10	A区南西	不整圓形	逆	台	形	-	100	m	88	m	78	cm	平	近	世	K 22	A区南西	方	形	-	直	線	形
SK 11	A区南西	不整圓形	逆	台	形	-	114	m	78	m	80	cm	平	近	世	K 23	A区南西	方	形	-	直	線	形
SK 12	A区南西	方	形	-	68	m	53	×	18	m	平	近											

第7表 SX1～5性格不明遺構 観察表

遺構番号	位	置	走	行	方	長	(m)	×	上端幅	(m)	深	さ(cm)	平	面	形	断	面	形	時	期									
S X 1	A区中央	不整圓形	面	E-1°-N	0.02	m	0.09	×	10	m	平	明	S X 4	A区北東	横円形	逆	台	形	W-4°-S	6.40m	×	4.20m	×	1.80m	平	明			
S X 2	A区中央	不整圓形	逆	台	形	N-14°-E	0.60	m	52	m	15	cm	平	明	或	S X 5	C区中央	不整圓形	U	字	形	W-6°-N	6.70	m	5.80	m	2.70	平	明
S X 3	A区中央	不整圓形	面	N-6°-W	0.60	m	52	×	10	m	平	明																	

第8表 SR1 自然流路跡 観察表

遺構番号	位	置	走	行	方	全長(m)	×	上端幅(m)	深さ(cm)	平	面	形	断	面	形	時	期		
SR 1	B区中央	N-55°-W	(4.30)	×	3.70	×	45			直	線		緩やか	立ち上がりの	逆	台	形	不	明

第9表 P1～42 観察表

遺構番号	位	置	走	行	方	長	(m)	×	上端幅	(m)	深	さ(cm)	平	面	形	規	模	長	幅	深	さ(cm)	面	時	期							
P 1	A区北西	横円形	面	U字	形	26	m	×	21	m	20	cm	平	明	不	P 22	A区中央	不整圓形	面	14.0	m	1.18	m	10	m	平	明				
P 2	A区北西	横円形	面	U字	形	26	m	23	m	20	m	20	cm	平	明	不	P 23	A区中央	横円形	逆	台	形	3.9	m	3.6	m	1.6	m	平	明	
P 3	A区北西	横円形	逆	台	形	35	m	21	m	21	m	21	cm	平	明	不	P 24	A区北東	小倒円形	逆	台	形	3.0	m	2.8	m	9.1	m	平	明	
P 4	A区北西	横円形	逆	台	形	35	m	21	m	21	m	21	cm	平	明	不	P 25	A区北東	横円形	逆	台	形	1.8	m	1.5	m	5.0	m	平	明	
P 5	A区北西	横円形	逆	台	形	51	m	21	m	21	m	21	cm	平	明	不	P 26	A区北東	横円形	逆	台	形	0.9	m	0.6	m	3.2	m	平	明	
P 6	A区北西	横円形	面	U字	形	31	m	28	m	28	m	45	cm	丸	底	不	P 27	A区北東	不整圓形	U字	形	3.0	m	2.0	m	26	cm	丸	底	不	明
P 7	A区北西	不整圓形	U字	形	28	m	22	m	22	m	26	cm	丸	底	不	P 28	A区南西	横円形	逆	台	形	0.9	m	0.5	m	25	cm	丸	底	不	明
P 8	A区北西	横円形	U字	形	47	m	32	m	16	m	丸	底	不	明	P 29	A区南西	不整圓形	U字	形	2.6	m	2.4	m	10	m	丸	底	不	明		
P 9	A区北西	横円形	面	U字	形	22	m	22	m	16	m	丸	底	不	明	P 30	A区南西	横円形	U字	形	2.0	m	1.6	m	3.2	m	丸	底	不	明	
P 10	A区北西	横円形	面	U字	形	32	m	22	m	16	m	丸	底	不	明	P 31	A区北東	横円形	不整圓形	逆	台	形	1.8	m	1.4	m	1.6	m	平	明	
P 11	A区北西	横円形	U字	形	22	m	21	m	21	m	24	cm	丸	底	不	P 32	A区南西	横円形	不整圓形	U字	形	2.9	m	2.4	m	3.5	m	丸	底	不	明
P 12	A区北西	横円形	面	U字	形	31	m	28	m	19	m	19	cm	平	明	不	P 33	A区南西	横円形	U字	形	3.0	m	2.2	m	24	m	丸	底	不	明
P 13	A区北西	横円形	面	U字	形	28	m	28	m	32	m	丸	底	不	明	P 34	A区南西	横円形	不整圓形	U字	形	3.1	m	2.0	m	14	m	丸	底	不	明
P 14	A区北西	横円形	面	U字	形	31	m	29	m	10	m	平	明	不	P 35	A区南西	横円形	U字	形	3.7	m	2.7	m	8	m	丸	底	不	明		
P 15	A区北西	不整圓形	面	72	m	70	m	18	m	平	明	不	明	P 36	A区南西	横円形	U字	形	3.0	m	2.5	m	8	m	丸	底	不	明			
P 16	A区北東	横円形	U字	形	24	m	21	m	16	m	丸	底	不	明	P 37	A区南西	横円形	不整圓形	逆	台	形	4.2	m	2.0	m	10	m	平	明		
P 17	A区中央	横円形	U字	形	28	m	22	m	24	m	丸	底	不	明	P 38	A区北東	横円形	不整圓形	逆	台	形	5.4	m	3.1	m	22	m	平	明		
P 18	A区中央	不整圓形	逆	台	形	40	m	26	m	26	m	平	明	不	P 39	A区北東	横円形	面	5.3	m	2.0	m	16	m	平	明					
P 19	A区中央	不整圓形	面	35	m	22	m	10	m	平	明	不	明	P 40	A区北東	横円形	逆	台	形	6.0	m	4.9	m	4.0	m	平	明				
P 20	A区中央	横円形	逆	台	形	70	m	48	m	19	m	平	明	不	P 41	A区北東	横円形	不整圓形	U字	形	5.4	m	5.3	m	6.4	m	平	明			
P 21	A区中央	不整圓形	U字	形	90	m	75	m	16	m	平	明	不	明	P 42	A区北東	横円形	逆	台	形	7.1	m	3.7	m	24	m	平	明			

写 真 図 版



A区 完掘全景（南から）



A区 北壁中央付近断面（南から）



A区 埼基礎部遺構検出状況（南から）



A区 北西部遺構検出状況（西から）



A区 南西部遺構検出状況（北から）

写真図版 1



A 区 SI1B(新) 竪穴住居跡 床面検出状況（南から）



A 区 SI1B 竪穴住居跡 東西ペルト断面（南から）



A 区 SI1B 竪穴住居跡 遺物出土状況（南から）



A 区 SI1A(古) 竪穴住居跡 床面検出状況（南から）



A 区 SI1 竪穴住居跡 完掘全景（南から）

写真図版 2



A区 S12 竪穴住居跡 床面検出状況（南から）



A区 S12 竪穴住居跡 東西ベルト断面（南から）



A区 S12 竪穴住居跡 遺物出土状況（北から）

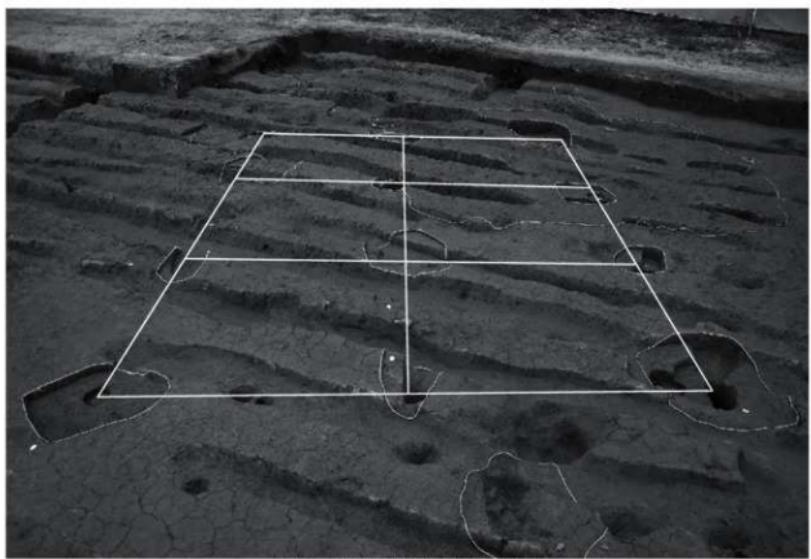


A区 S12 竪穴住居跡 カマド（南から）



A区 S12 竪穴住居跡 完掘全景（南から）

写真図版 3



A区 SB1 据立柱建物跡全景（南から）



A区 SB1-P4 断面（南から）



A区 SB1-P6 断面（東から）



A区 SB1-P9 断面（西から）



A区 SB1-P12 断面（東から）

写真図版 4



A区 SD1 溝跡 完掘全景（南から）



A区 SD2 溝跡 断面（南から）



A区 SD3・5 溝跡 完掘全景（北から）



A区 SD4 溝跡 完掘全景（東から）



A区 SD6・7 溝跡 完掘全景（東から）



A区 SD8 溝跡 断面（北から）



A区 SK1 土坑・P20 断面（北から）



A区 SK2 土坑 断面（南から）

写真図版 5



A区近世墓群 完掘全景（南から）



A区SK3墓壙 遺物出土状況（北西から）



A区SK4墓壙 遺物出土状況（南から）



A区SK5墓壙 遺物出土状況（南から）



A区SK5墓壙 毛抜き出土状況（北から）

写真図版 6



A区 SK6 墓壙 遺物出土状況（南から）



A区 SK7 墓壙 陶器碗出土状況（西から）



A区 SK8 墓壙 遺物出土状況（西から）



A区 SK9 墓壙 遺物出土状況（西から）



A区 SK10 墓壙 遺物出土状況（南から）



A区 SK11 墓壙 遺物出土状況（東から）



A区 SK12 墓壙 遺物出土状況（東から）



A区 SK13 墓壙 遺物出土状況（西から）

写真図版 7



A 区 SK14 墓壙 遺物出土状況（西から）



A 区 SK15 墓壙 遺物出土状況（南から）



A 区 SK16 墓壙 遺物出土状況（西から）



A 区 SK16 墓壙 ガラス小玉出土状況（南から）



A 区 SK17 墓壙 埋葬施設完掘全景（東から）



A 区 SK18 墓壙 遺物出土状況（南から）



A 区 SK19 墓壙 遺物出土状況（東から）



A 区 SK20 墓壙 遺物出土状況（北東から）

写真図版 8



A区 SX1 性格不明遺構 完掘全景（東から）



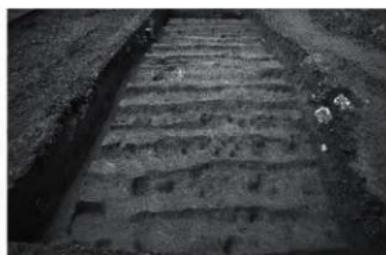
A区 SX2 性格不明遺構 土層断面（南から）



B区 完掘全景（東から）



B区 西壁断面（東から）



C区 完掘全景（南から）



C区 北壁断面（南から）

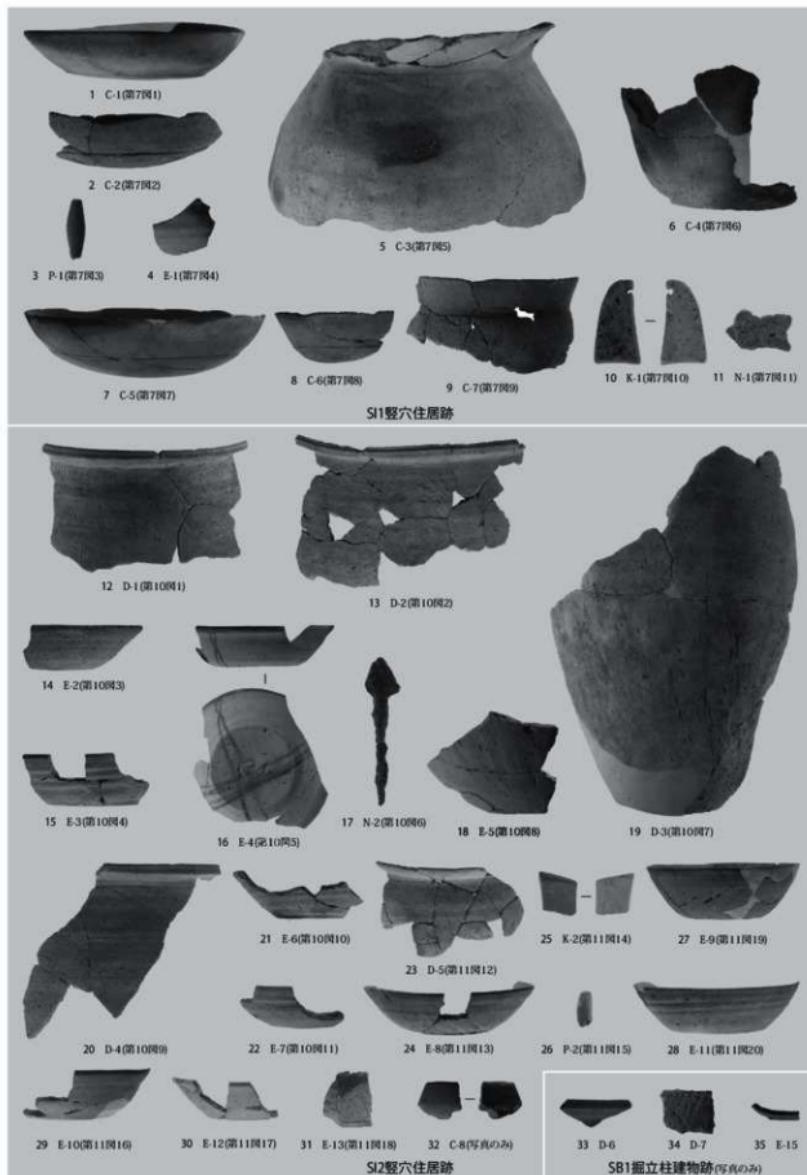


C区 西壁南端断面（東から）

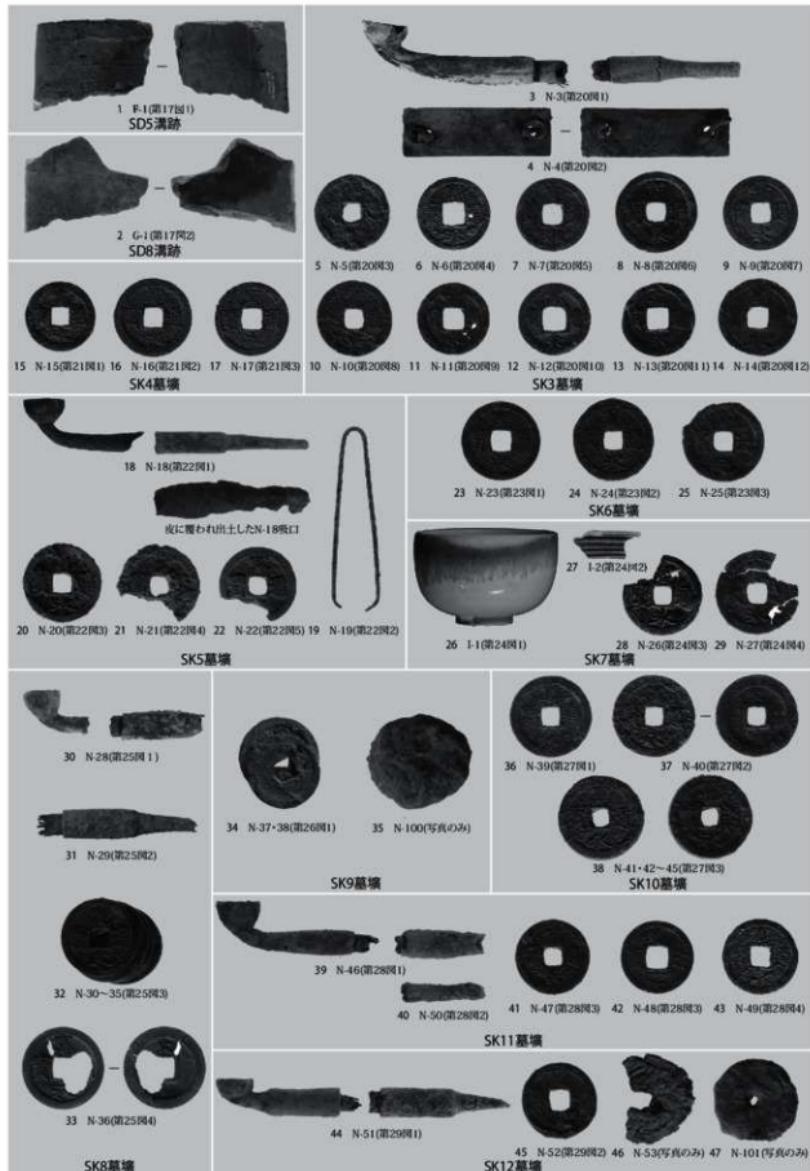


C区 SX5 性格不明遺構 断面（西から）

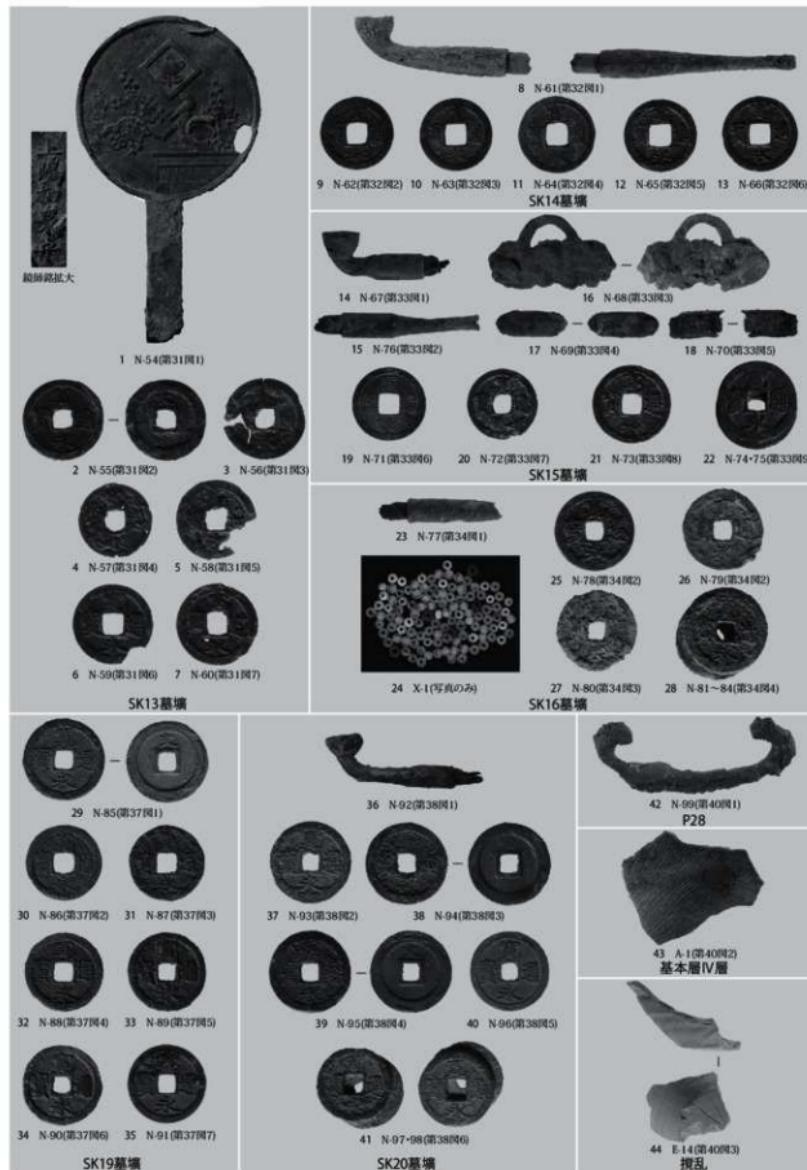
写真図版 9



写真図版10 (1~35:約1:1)



写真図版11 (古銭:約2/3, 細管・4・10:約1/2, 瓦・陶器:約1/4)



写真図版12 (古銭:約2/3, 瓶口:16~18・24:約1/2, 1・42:約1/3, 43・44:約1/4)

報告書抄録

ふりがな	みなみこいすみいせき						
書名	南小泉遺跡						
副書名	第61次発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第362集						
編著者名	荒井格・熊谷敏哉・閔根信夫・佐藤公保						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1番1号 電話 022-214-8894						
発行年月日	2010年3月12日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みなみこいすみいせき 南小泉遺跡 3丁目27-1, 17	仙台市若林区古城	41009 01021	38° 14' 02"	140° 54' 28"	20090728 ～ 20091014	約600m ²	仙台少年団別所の序 合新築工事に伴う事 前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
みなみこいすみいせき 南小泉遺跡	集落	古墳後 平安 近世	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡 近世墓	土師器・須恵器 鐵器・土鍬 寛永通宝・燈籠 和鏡・毛抜き ガラス製小玉	古墳時代後期と平安時代の堅穴住 居跡、平安時代と推定される堅柱 掘立柱建物跡、近世墓を発見した。		

仙台市文化財調査報告書第362集

南小泉遺跡

-第61次発掘調査報告書-

2010年3月

発行 仙台市教育委員会

〒980-8671 仙台市青葉区二日町1番1号

文化財課 022(214)8894

印刷 今野印刷株式会社

〒984-0011 仙台市若林区六丁の目西町2-10

022(288)6123